



# CPEHE

## Annual Report 2018

平成30年度  
京都大学高等教育研究開発推進センター活動報告





## Contents

I. はじめに	1
II. 教育・授業改善、FD	
1. 全学教育シンポジウム	2
2. 「3つのポリシー」勉強会	5
3. 新任教員教育セミナー	6
4. プレFD	10
5. 他部局との連携	14
6. 高等教育研究開発推進センターウェブサイト	17
III. ICTの教育的活用	
1. オープンコースウェア(OCW)	18
2. KyotoUx：大規模オープンオンライン講義(MOOC)	20
3. KoALA：学生向けオンライン講義(SPOC)	23
4. 教育コンテンツ活用推進委員会	27
5. MOST(オンラインFD支援システム)	29
6. ICT活用教育のためのポータルサイト(CONNECT)	30
7. 高大接続を促進するためのポータルサイト(KNOT)	32
IV. 教育アセスメント	
1. 医学部との連携	33
2. 教育学部との連携	34
3. 産学協働イノベーション人材育成協議会との連携	35
4. MOOC・SPOCのアセスメント	36
V. 国際連携	
1. 国際シンポジウム	39
2. MSUとの交流	40
3. 公開研究会	40
4. 訪問・参加報告	41
VI. コミュニティ・ネットワーク形成支援	
1. あさがおメーリングリスト	42
2. 大学教育研究フォーラム	42
VII. 産学連携	
1. 学校と社会をつなぐ調査	44

## I. はじめに

### センターと各部局との連携強化による教育支援のさらなる拡充

高等教育研究開発推進センターは、国立大学法人の第3期中期目標・中期計画期間において、京都大学の教育改革・改善をより広範にわたって一層強力に支援・推進するため、以下の新たなミッションと共に、2016年度から「全学機能組織」として再出発しています。

- 高等教育における教授法、教育課程、教育評価、教育制度、ICT活用等、教育システムにかかる開発と実践を行う。
- 本学の教育改革・改善に資する取り組みについて、専門的立場から調査・企画・実施・評価・助言・協力を行う。
- 実践的研究に基づく成果を、本学の教育の質の向上に供するとともに、国内外の高等教育の発展に寄与する。

現在、本センターは、「高等教育教授システム研究開発部門」、「教育メディア研究開発部門」、「教育アセスメント室」の2部門・1室から構成されており、様々な教育支援の取組や産学共同研究プロジェクト等を通して、多面的・創発的な教育改革・教育改善に取り組んでいます。この「CPEHE Annual Report」では、学内各部局や関連諸機関との連携を通じた先進的・萌芽的な試みも含め、本センターの様々な活動や事例が具体的に紹介・報告されています。

近年、本センターは、長年に渡って開催されてきた「全学教育シンポジウム」、「新任教員教育セミナー」、「大学院生のための教育実践講座」等の全学的FDの支援に加えて、できるだけ多くの学内各部局やプロジェクトと連携し、それぞれのニーズに合った教育支援を行うことに尽力してきました。

例えば、FD・教育改善支援については、文学研究科プレFDプロジェクト、医学教育・国際化推進センターとの連携による「現場で働く指導医のための医学教育学プログラム(FCME)」、薬学部とのアクティブ・ラーニングを取り入れた初年次科目等の授業改善や学生の学習・生活実態調査の支援、宇宙総合学研究ユニットとの連携による「有人宇宙教育プログラム」のカリキュラムや評価のデザイン支援などに取り組んでいます。

ICTを利用した先端的な教育・学習支援については、各部局のオープンコースウェア(OCW)や大規模オープンオンライン講義(MOOC)の取組状況や、学内で運用が始まっているKoALA(SPOC: Small Private Online Courses)を用いた「より柔軟な教育・学習方法をオンライン講義・教材の活用」等の取組について、本報告書で詳しく紹介されています。

KoALAの活用については、例えば、本センターの総長裁量経費プロジェクト「SPOCを活用したELCASの拡充と京都大学OCW再利用を通じた高大接続の推進」によって、ELCASの提供する質の高い教育プログラムを「いつでも・どこでも」受講可能にする仕組みを開発し、新たなオンライン講義の制作・提供を行ったり、既に多く蓄積されている本学のOCWやMOOC等の教育コンテンツの一部を再利用しSPOC教材化することを目的として、高校生向けの教育提供のより一層の拡充に取り組まれました。これらの取組については、教育におけるICTの活用に関するポータルサイト「CONNECT」や京都大学のオープンな教育コンテンツの活用促進によって高大接続・高大連携を支援するポータルサイト「KNOT」も是非ご参照ください。

さらに、学内の各教育支援組織・部局との連携を通じて全学・各部局の教育学習改善支援の一翼を担う本センターの教育アセスメント室の活動として、前出の医学部教学IRの推進、教育学部との連携による体系的アセスメント(学生調査や特色入試入学者の追跡調査等)の推進、産学協働イノベーション人材育成協議会(C-ENGINE)との連携による大学院生の研究インターシップの成果検証と評価ツール開発についても掲載されています。

最後になりましたが、本報告書で網羅されている諸活動やウェブサイト(<https://www.highedu.kyoto-u.ac.jp>)等を通じ、本センターが、今後とも本学の教職員や各部局の抱える様々な教育的課題の解決・改善のお役に立てれば幸いです。本センターの活動と展開に、引き続きご理解とご協力を賜りますよう、何卒よろしくお願ひ申し上げます。



京都大学高等教育研究開発推進センター長  
飯吉 透



## II. 教育・授業改善、FD

### 1. 全学教育シンポジウム

本シンポジウムは、1996年から年1回開催されており、京都大学の教職員が全学的な教育のあり方や、教育の改善・充実の方向性について議論し、部局の枠を超えた教職員の交流を図る場にもなっています。近年は教育担当理事が主催し、2016年度からFD研究検討委員会の企画により、本センターが実施・運営を行っています。

昨今、我が国の高等教育において、博士課程進学者の減少をはじめとする大学院離れの傾向、大学から大学院への接続(=大大接続)や大学院から社会への接続(あるいは社会から大学院への接続)の改善が喫緊の課題となっています。そうした状況の中で、22回目にあたる今回のシンポジウムでは、「京都大学の大学院教育の今とこれから」をテーマに設定し、多様な観点からこのテーマについて考えることにしました。

2018年9月7日に桂キャンパス・船井哲良記念講堂で開催され、参加者は207名でした。

#### (1) プログラム

午前の部では、京都大学を取り巻く教育改革の現状や方向性に関する北野正雄教育担当理事・副学長の基調講演に続けて、本学の自然科学分野および人文・社会科学分野の大学院から、5名の研究科長・部長・専攻長にご登壇いただき、各研究科等における大学院教育や大大接続に向けた取り組みについて、ご報告いただきました。

午後の部では、大学院教育の現状と課題について俯瞰し展望する山極壽一総長の基調講演に始まり、大学院教育における新たな潮流として、ブレFDプログラムやインターンシッププログラムなどについての4つの報告を共有した後、京都大学の大学院教育の未来について、執行部および企業等から6名の方にご登壇いただき、パネルディスカッションを行いました。クリッカーを使いながら、会場からのレスポンスをふまえて活発な意見交換がなされました。



基調講演1



テーマ1: モデレーター・報告者



## (2)参加者の声

参加された教職員の感想・意見をうかがうために、アンケート調査を実施しました(有効回答数72件、回収率31.2%)。興味深かったプログラムでは、基調講演2の「大学院教育をめぐる現状と課題」(40名)がもっとも多く挙げられ、テーマ1「本学の大学院教育改革:研究科等の取組」(39名)、基調講演1「京都大学の大学院・大大接続の現状と課題」(34名)と続きました(図1)。また興味深かった点に関する自由記述では、「組織改革、学部1年生の授業内研究室訪問の取り組みなど、やはり手厚く学生に対応せねばならんのだと思った」「挑戦的な未来に向けた教育改善の取り組みを各部署がすすめていることは勉強になった」「大学院および大学院教育の危機・存在そのもののあり方を問い、共有することができた」といった感想もあり、プログラムは概ね好ましく評価されていました。

また、小規模な勉強会・ワークショップを企画した場合、参加したいと思うテーマでは、「世界の研究大学の教育改革」(40.3%)、「カリキュラムの改革」(18.1%)、「教育方法(アクティブラーニング、PBLなど)」(18.1%)、「英語による授業」(15.3%)、「入試改革(新テスト、特色入試など)」(15.3%)などが多く挙げられており、京大と同様の研究大学における教育改革への関心が際だっていました。自由記述の中では、報告内容についてのクリティカルなコメントや、問題の指摘ではなくビジョンを示してほしいという意見も寄せられました。

これらの結果から、それぞれの参加者が京都大学の教育改革の方向性について、また京都大学の存在感をどのように高めてそれをどう発信していくかなどについて振り返り、ともに議論する機会を提供できたのではないかと考えられます。

当日の詳細な報告書は下記からご覧になれます。

- 全学教育シンポジウム: <http://www.fd.kyoto-u.ac.jp/activity/symposium.php>

(松下 佳代・長沼 祥太郎)



基調講演2



テーマ2: モデレーター・報告者



テーマ3: モデレーター・パネリスト



## 全学教育シンポジウム プログラム

司会進行:山田 剛史 高等教育研究開発推進センター准教授

## 【午前の部】

10:00～	開会挨拶・基調講演 1:「京都大学の大学院・大大接続の現状と課題」 北野 正雄 教育担当理事・副学長
10:35～	テーマ1:報告・パネルディスカッション 「本学の大学院教育改革:研究科等の取組」 《モデレーター》松下 佳代 高等教育研究開発推進センター教授 《報告者・パネリスト》 足立 壮一 医学研究科人間健康科学系専攻長・教授 稲垣 恭子 教育学研究科長・教授 大嶋 正裕 副理事・工学研究科長・教授 高倉 喜信 薬学研究科前研究科長・教授 原 良憲 経営管理研究部長・教授

12:05～ (昼食・休憩)

## 【午後の部】

13:00～	基調講演 2:「大学院教育をめぐる現状と課題」 山極 壽一 総長
13:35～	テーマ2:報告 「大学院教育・専門家教育の新たな潮流」 《モデレーター》田口 真奈 高等教育研究開発推進センター准教授 《報告者・パネリスト》 出口 康夫 戦略調整担当理事補・文学研究科教授 錦織 宏 医学研究科附属医学教育・国際化推進センター准教授 杉野目道紀 戦略調整・教育担当理事補・工学研究科教授 飯吉 透 教育担当理事補・高等教育研究開発推進センター長・教授
15:10～	(休憩)
15:25～	テーマ3:パネルディスカッション 「大学院教育の未来」 《モデレーター》飯吉 透 教育担当理事補・高等教育研究開発推進センター長・教授 《パネリスト》 山極 壽一 総長 北野 正雄 教育担当理事・副学長 川添 信介 学生担当理事・副学長 有賀 哲也 教育改革担当副学長・理学研究科教授 喜多 一 情報環境機構長・国際高等教育院教授 古藤 悟 三菱電機先端技術総合研究所技術顧問・(一社)産学協働イノベーション人材育成協議会理事
16:55～	閉会挨拶
17:00～	終了
17:15～	情報交換会 カフェ「Arte」

## 2. 「3つのポリシー」勉強会

京都大学では現在、全学の教育制度委員会の下で、「3つのポリシー」の見直しが進められています。本センターは、教育推進・学生支援部教務企画課と連携して、この改革を支援しています。

### (1) 勉強会の開催

2018年12月26日、2019年1月15日の2回にわたって、「3つのポリシー」勉強会を開催しました。3ポリシーについては、2016年に策定・公表が義務化されたため、2016年度にも勉強会等を実施しましたが、そのときは学部が主で、大学院についてはアドミッション・ポリシーのみの見直しにとどまっていた。今回の見直しは、2019年度に受審する第3期認証評価を念頭においたものであり、学部・大学院(研究科、専門職大学院、リーディングプログラム)のすべてを対象としています。

すでに教育制度委員会から各部局に、「3つのポリシー等に関するチェックリスト」「各ポリシー見直しの視点」といった見直しのためのツールが提供されていたため、本センターでは、3ポリシーの考え方、認証評価との関係、見直しのポイントなどを、具体例にもとづいて説明するとともに、各部局の見直しを個別に支援することとしました。

第1回勉強会では、策定上の留意点についてセンターから説明した後、意見交換し、希望部局に対して相談会を行いました。第2回勉強会は、これまでのQ&Aを簡単に整理して示し、大半の時間を相談会にあてました。勉強会の参加者の多くは各部局の3ポリシー策定担当者で、参加者数は第1回が47名(20部局)、第2回が20名(11部局)でした。

主な相談内容としては以下のような点がありました。

- 学部・大学院の中には様々な専攻やプログラム等があるが、それをどう記載すればよいか。
- ディプロマ・ポリシーにおいて、社会的ニーズや学修目標をどう表現すればよいか。
- 3ポリシーは頻繁に変更できるものではないのである程度の抽象性をもたせた書き方になるが、一方で「明確かつ具体的」であることを求められる。その折り合いをどうつければよいか。

なお、いくつかの部局では、AP→CP→DPという順序で読み進めることを前提とした書き方がなされていますが、もともと3ポリシー設定の背景には学位の国際的通用性を高めるという要請があることから、DP→CP→APという順序でロジックを組み立てることが求められています。勉強会ではそのことを強調しました。



### (2) 個別コンサルテーション

勉強会以外に、要望のあった部局(農学部・農学研究科、教育学部・教育学研究科、薬学研究科、工学部・工学研究科、アジア・アフリカ地域研究研究科、医学研究科社会健康医学系専攻、法学部・法学研究科:1月20日現在)に対しては、個別にコンサルテーションを行いました。

各部局から修正のうえ提出された3ポリシーは、教育制度委員会で検討され、2019年5月には公開されることになっています。

- 「3つのポリシー」勉強会

<http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/event-2/>

(松下 佳代)





### 3. 新任教員教育セミナー

2018年9月19日、京都大学百周年時計台記念館にて、「京都大学新任教員教育セミナー2018」を開催しました。本セミナーは、今年度が第9回となり、本学に採用された新任教員および助教から昇任された教員を対象に実施しています。

京都大学らしい教育の在り方について考えたり、学内に存在する様々な教育支援について知っていただいたり、実際に直面している教育に関する問題や学生指導上に関わる課題などについて共有したりする場所になるようプログラムを作っています。

#### (1) プログラム

プログラムは表1の通りです。全学、部局、個々の教員という異なるレベルでの教育的取組を、ミニ講義や討論などを通じて理解してもらうことを意図して設計されています。

表1 2018年度京都大学新任教員教育セミナープログラム	
13:00～	開会式（司会：高等教育研究開発推進センター准教授 山田 剛史） 趣旨説明 高等教育研究開発推進センター准教授 山田 剛史
13:05～	セッション1 オープニングレクチャー 「現在の大学教育の動向と京都大学の教育改革」 理事・副学長(教育・情報・評価担当) 北野 正雄
13:30～	セッション2 ミニ講義 「埋め込み型研究公正教育のすすめ」文学研究科准教授 伊勢田 哲治
13:55～	セッション3 私の授業 理学研究科教授 沼田 英治
14:20～	セッション4 京大の教育・学習支援 高等教育研究開発推進センター准教授 山田 剛史/田口 真奈
14:30～	休憩
14:50～	セッション5 グループ別セッション（参加型セッション）（詳細は表2参照）
16:30～	休憩
16:50～	セッション6 インテグレーションセッション
17:30～	閉会式 閉会挨拶 高等教育研究開発推進センター教授 松下 佳代

全体会では、まずセッション1として、北野正雄教育担当理事・副学長より「現在の大学教育の動向と京都大学の教育改革」と題したオープニングレクチャーがありました。大学を取り巻くマクロな状況を踏まえつつ、本学が取り組んでいる様々な教育改革について紹介がありました。特に、昨今話題になっている高大接続に関する取組について、新たに始まった特色入試も交えながら紹介されました。

セッション2では、伊勢田哲治文学研究科准教授より「埋め込み型研究公正教育のすすめ」と題したミニ講義がありました。高等教育機関全体にとって喫緊の対応課題となっている研究公正について、教育(授業)に埋め込む形で学生への研究公正を行うという先進的な取組が紹介されました。



セッション3は、自身の授業実践を紹介する「私の授業」でした。今回は、沼田英治理学研究科教授より授業実践の紹介がありました。沼田教授がコーディネーターを務める生物学のフロンティアをはじめ、これまでに実施してきた様々な授業を振り返って、「講義において重視していること」について紹介されました。

セッション4では、本センターの山田剛史准教授、田口真奈准教授から「京大の教育・学習支援」について紹介がありました。実際には冊子にまとめた『教育サポートリソース』、「センターウェブサイト」、ICT活用教育に関するポータルサイト「CONNECT」について配布・提示しました。

その後、セッション5は、参加型セッションとして、用意した5つのテーマごとに部屋に分かれてのワークショップがありました(表2)。最後のセッション6は、再度全体で集まってジグソー形式によるインテグレーションセッションを行いました。

テーマ	担当講師	主な内容	ファシリテーター (センター担当者)
京都大学の国際化をどのように進めるか	国際戦略本部特定講師 フェルナンド・パラシオ	本学では、一層の学術の発展と持続可能な地球社会の構築に貢献するために、国際化のための包括的な計画を提示する「国際化推進に関する基本コンセプト」を策定しました。本セミナーでは、このコンセプトを出発点に、京都大学の国際化を推進するためのベストプラクティスについて、参加者のみなさんとともに検討したいと思います。	SADEHVANDI 研究員 河野研究員
研究室運営を考える	学際融合教育研究推進センター 准教授 宮野 公樹	教員にとっての研究推進の場、そして高度な人材育成の場である研究室。研究室を研究と教育の原動力として機能させるにはどうしたらいいでしょうか。PI(Principal Investigator)各々のやり方があるとは言え、この機会に一度考えておくのも大事かと思えます。いくつかの事例と調査結果を紹介いたします。	岡本特定助教
困難を抱えた学生に向き合うには	学生総合支援センター カウンセリングルーム准教授 中川 純子	修学上、研究指導上の不適応を起こした学生・院生に対し、教員はどう向き合えばよいのでしょうか。学生のその後の人生を大きく左右する時期に関わっていることを意識し、可能な対応を探るにはどうすればよいでしょうか。今回は様々な不適応の様相の紹介と「困難」を知る、あるいは気づくための話の聞き方を体験・実習したいと思います。	鈴木特定研究員
アクティブラーニング型授業をやってみよう	薬学研究科講師 津田 真弘 高等教育研究開発推進センター 教授 松下 佳代	今年度から薬学部では、アクティブラーニングを取り入れた授業(講義を聴くだけでなく、話す、書く、発表するなど学生側の能動的な参加を含む授業)に取り組んでいます。その中で、学生たちは能動的に参加するだけでなく、協働で深く学ぶ姿勢を身につけています。このセミナーでは、その授業で使っているさまざまなやり方、技法を実際に体験してもらいながら紹介します。アクティブラーニングについてまったく初めての方から、この機会にしっかり学びたいという方まで参加できます。	川内研究員
ICTを使って、普段の授業をもっと楽しく、ちょっと楽に	高等教育研究開発推進センター 准教授 田口 真奈/酒井 博之 情報環境機構教授 梶田 将司	インターネット上の教育リソースや既存のICTツールをうまく使うことで、授業準備が楽になったり、教育効果をあげたりすることができます。ここでは、学内のICT活用実践事例や、簡単に使える様々なリソースを紹介します。ICTを使うのはちょっとめんどくさい、と思っておられる先生にとっては、最初のハードルが下がるような、もっと使ってみたい、と思っておられる先生にはその可能性を感じていただけるようなセミナーにしたいと思います。	安宅特定研究員



### (2)参加者

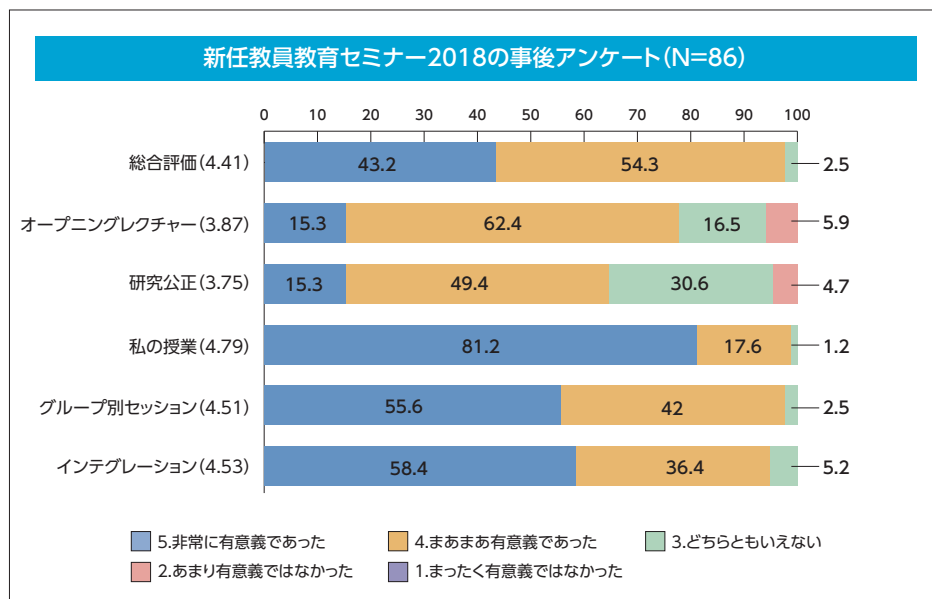
本セミナーは、教育目的に限定して設定されているため、受講対象となる新任教員を、「平成29年度の本セミナー実施以降、本学に採用されて、正規科目を担当している者」と定義した上で、教育推進・学生支援部教務企画課経由で、各部署に対して参加者依頼通知を行いました。当日の参加者は96名(教授7名、准教授30名、講師9名、助教50名)でした。

### (3)参加者からの評価

セミナー参加者に対して、セミナーに対する意見・感想を問う事後アンケートを行いました。その結果、86名(全体の89.6%)から回答が得られました。

### プログラムの有意義度

プログラム全体の有意義度は、5段階で4.41(「非常に有意義」から「まったく有意義でない」の5段階)と高い評価が得られました(下図参照)。また、個々のセッションについて見てみると、上位項目としては、私の授業(4.79)、インテグレーションセッション(4.53)、グループ別セッション(4.51)となっていました。



## プログラム全体／グループ別セッションで追加すると良いと思われるもの

### (プログラム全体について)

- 私の授業をもう少し幅広いテーマででききたい。
- 時間的には難しいですが、他のセッションのお話を聞きますと、他も面白そうでしたので、参加(経験)できればよかったです、とは思いました。
- 5-3は全員やっていい内容ではないかと思う。
- セッション5の時間を長くして、複数選ぶのも良いと思う。
- セッション5(5の3)、6の様な参加型プログラムは追加しても良いと思う。
- 人数は少ないかもしれませんが人文系の教員もいるので、できればもう少しそこに目を向けていただければと特に5のセッションで嬉しいです。
- 他分野の先生と普段の悩みを共有できる機会を増やして欲しい。
- 異分野の連携による教育・研究など、良い取り組みがあれば聞いてみたいと思いました。
- 学生を何らかの形で参加してもらえないでしょうか。学生側の生の声(本音)が知りたい。

### (追加すると良いテーマについて)

- 今の学生の傾向や特徴などについてのレクチャー
- コミュニケーション研修やハラスメント研修(全体向)
- コーチング方法について
- 時間のマネジメント
- 京都大学の取組紹介 おもしろチャレンジとかアカデミックデイとか…
- 障害学生支援について
- 発達障害などをテーマにあげてほしい。
- 留学生支援、障害等多様な学生との関わり方
- 研究と教育のweight(バランス)について
- 研究室の運営に関わるお金のはなし
- 研究室における教員間(教授⇔准教授⇔助教)の付き合い方
- 国際化推進についての話は、もっと教育にかかわる形でするとよいと思いました。
- 女性キャリア、京大学生(学部卒)でない学生・会社員への授業について

## 本セミナーに参加して良かった点

参加して良かった点に関する自由記述には多くの感想をいただきました。全てを掲載することはできませんが、他分野の先生方との交流を好意的に捉えておられる先生が多かったです。他にも

- 普段は個人の研究成果の向上などに意識が向きがちですが、大学の一員としての意識が高まり、良いと思いました。
- 普段の業務では全く聞く事が出来ない様な話や意見をお聞きする事が出来ました。自分だけではなく研究室の他の人にも知っていただきたい内容でした。
- 自分の(研究室・学部)以外の授業の仕方、研究室運営のノウハウを学べたのが大変有意義でした。もし許されるのであれば、振り返りとして数年後にもう一度このようなセミナーに参加したいです。
- グループワーク等で多くの先生方とお話できる機会を持てたのが有意義でした。各セッションの内容も大変為になるものばかりでした。

といった感想が寄せられました。

こうした意見を参考に、今後もよりよいプログラムになるよう改善していきたいと思います。

(山田 剛史)

## 4. プレFD

「プレFD」とは、これから大学教員になるとうとする大学院生やオーバードクター(OD)・ポスドク(PD)のための職能開発活動の総称です。ここでは、本センターが支援する、4つのプレFDの取組についてご紹介いたします。

### (1) 文学研究科プレFDプロジェクト

文学研究科プレFDプロジェクトは、文学研究科とFD研究検討委員会が共同で主催する、文学研究科のODによるリレー講義形式のゼミナールで、2009年度から実施されています。

本プロジェクトは、年度はじめの事前研修会、各ODを講師とする2回以上の公開授業、他の講師およびコーディネーターを交えた授業ごとの検討会、そして年度末の事後研修会により構成されます。所定の条件を満たした講師には、京都大学総長よりプロジェクトの修了証が授与され、すでに約150名が修了証を得ています。

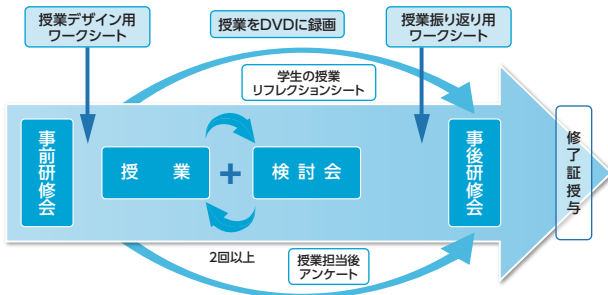
2018年度は、文学研究科よりコーディネーター6名、教務補佐員5名、講師24名が参加し、本センターより5名がこれをバックアップする形で、行動・環境文化学系、哲学基礎文化学系と基礎現代文化学系の3つのリレー講義が展開されました。

本授業は、公開授業となっており、学内教職員の参観は随時可能です。日程などの詳細は、下記のHPをご覧ください。

- 文学研究科プレFDプロジェクト

<http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/prefd/literature/>

(鈴木 健雄・田口 真奈)



文学研究科プレFDプロジェクトの流れ





## (2) 大学コンソーシアム京都・単位互換リレー講義

文学研究科プレFDプロジェクト修了後の発展的プログラムとして、大学コンソーシアム京都との連携のもと、京都大学大学院文学研究科が提供する単位互換リレー講義「京都で学ぶ人文学」が開講されました。本授業は、2015年度～2017年度まで開講された「人文学入門」を継続、発展させたものであり、特色ある科目として「プラザ推奨科目」に認定されています。受講生は、京都大学の学生を含め、様々な大学から集まっています。

本プログラムでは、プレFD修了生が協力し合い、個々の担当授業だけでなく、半期15回の講義全体をデザインするという経験を積むことに主眼がおかれているため、プロジェクトは開講の前年からスタートします。そこで、各自の担当授業と、全体目標とのすりあわせを行いながら、シラバス作成を行います。また、開講直前には、それぞれが「授業デザインワークシート」を持ち寄り、全体の到達目標を見据えて、各自の授業目標を確認、そのための具体的な授業デザインを検討し合います。

2018年度の開講テーマは「『エラそう』なものを疑おう！ 社会の不合理を考える異分野コミュニケーション」でした。コーディネーター1名のもと、倫理学や心理学、宗教学、社会学、言語哲学といった様々な専門分野出身の若手講師7名が、アクティブラーニング型の授業を展開しました。一方的な知識伝達だけでなく、受講生間のディスカッションを促す工夫が凝らされた本講義を通じて、受講生は、社会的規範や「当たり前」とされるもの、権威づけられた対象や制度をいかに疑い、疑った先にどんな新しい認識が得られるのかについて理解を深めました。

若手講師がそれぞれ創意工夫を凝らし、アクティブラーニングを取り入れた授業形式にも積極的に挑戦した本授業に対して、受講生からは、「普段見逃していた矛盾点(エラそうなもの)に気付きました。グループワークで先生を交えつつ議論し、深く探究できたので良い経験になりました」「先生も一緒になって悩んでくれて嬉しく、先生や生徒との距離が近い授業で充実していました。いろんな先生が私たちに一生懸命に何かを伝えようとしてくれているのが伝わってきました」「あまり勉強は好きではないのですが、最終的に、意欲的になれるキッカケをくれました」などの感想がありました。ここからは、プレFD修了生たちの授業が、内容・形式ともに魅力的なものとなっていることがうかがえます。

### ● 文学部単位互換リレー講義「京都で学ぶ人文学」

<http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/prefd/literature/consortium/>

(鈴木 健雄・田口 真奈)



### (3) 大学院生のための教育実践講座

本講座は、京都大学FD研究検討委員会と本センターが共催し、将来、大学教育に携わることが希望する京都大学の大学院生(PD・研修員などを含む)のために、ファカルティ(大学教員)へと自己形成していくきっかけとなる場を提供するプログラムです。今回で14回目となります。2018年度は、8月21日に、百周年時計台記念館2階で開催されました。様々な専門分野から32名が受講し、大学教育の現状をおさえるための基本的な講義、それをもとに授業実践について多様な観点から検討するためのジグソー法を取り入れたグループワーク、劇団の方をお招きしてコミュニケーションデザインを学ぶボディワークまで、とても豊富な内容で、受講生それぞれが「大学でどう教えるか？」に対する考えを深めながら、大学院生同士のネットワークを広げました。加えて、全てのプログラムに参加した受講生には総長名の修了証が授与されました。

終了直後にアンケートを実施し、プログラム全体に対する満

足度を5件法(1: まったく満足していない~ 5: 非常に満足している)で受講生に評価してもらったところ、満足度の平均が4.7点と、非常に高い満足度でした。また、今回初めて、各分科会のまとめをポスター発表の形式で行ったのですが、その評価も4.7と好評でした。このような講座に対してどう思うかに関する自由記述では、「大学教育を目指す大学院生は、研究能力については常に考えるにもかかわらず、大学教育について考える機会がないのは問題だと考えていたので、とてもよいと考えます」など、このような講座の必要性を認め、評価する感想が数多く見られました。

● 大学院生のための教育実践講座

<http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/prefd/study/index.html>

(松下 佳代・長沼 祥太郎)

プログラム	
10:00~	開会式 挨拶：北野 正雄 理事・副学長
10:20~	セッション 1 ミニ講義 1 「大学を取り巻く状況と多様な授業実践」： 松下 佳代 高等教育研究開発推進センター教授
10:45~	セッション 2 グループ討論 1： 「アクティブラーニング」「ICT活用」「多様性」「授業デザイン」の 4つの部会に分かれて議論
11:45~	セッション 3 ランチと自由討論
13:00~	セッション 4 コミュニケーションデザイン 「演劇でコミュニケーションデザイン」： 蓮行 劇団衛星主宰
14:20~	セッション 5 ミニ講義 2 「私の授業実践」： 斎藤 有吾 藍野大学助教
15:05~	セッション 6 グループ討論 2： 「アクティブラーニング」「ICT活用」「多様性」「授業デザイン」の 4つの部会に分かれて、さらに深く議論
16:05~	グループ討論整理
16:40~	セッション 7 全体討論：ポスター形式で4部会から7グループのポスターを掲示し、 活発な議論を展開
17:40~	ラップアップ
17:55~	閉会式 挨拶・修了証授与： 飯吉 透 FD研究検討委員会委員長・高等教育研究開発推進センター長 閉会式終了後 情報交流会 (~18:30)



#### (4) 大学院横断教育科目群「大学で教えるということ」

京都大学では、所属研究科の高度な専門教育に加えて、研究科を横断する教育プログラム(研究科横断型教育プログラム)を2009年度から実施してきました。2018年度からは当該プログラムを改編して、研究科が開講する科目の中で、他研究科学生の履修にも配慮され、多くの専門分野の共通基盤となりうる科目、多数の研究科の大学院生が受講するに相応しい横断的な教育内容の科目をまとめ、「大学院横断教育科目群」として履修できるように整備されました。

その中の「キャリア形成系」(従来は「マネジメント・キャリア・研究者倫理科目群」)の科目として、将来教育職に就くことを希望する大学院生向けの科目「大学で教えるということ」(後期集中講義)を提供しています。「大学院生のための教育実践講座」は、講義とディスカッションが主体の入門的な内容になりますが、本授業は実際の授業をデザインし、模擬授業やピアレビューを行うなど、実際に授業を実践するうえでの基礎となるスキルの育成を含めた応用的な位置づけになっています。本授業の到達目標は以下の通りです。

- (1) 大学教育の現状を知り、理解すること
- (2) 授業デザインに関する基本的な知識を知り、理解すること
- (3) 効果的な授業デザイン(到達目標・評価方法)を作成すること
- (4) 多様な授業方法を知り、活用方法を計画すること
- (5) 模擬授業・検討会を通じて、授業実践の技能を磨くこと
- (6) グループでの協同作業に積極的に関わること
- (7) 自身が大学で教えることに関する広い視野と具体的なイメージを持つこと

2018年度は2月6日・7日・8日の3日間で実施されました。受講生は12名で、修士課程から博士後期課程まで幅広い大学院生が受講しました(医学研究科2名、人間・環境学研究科3名、経営管理大学院4名、公共政策大学院1名、教育学研究科2名)。専門分野の異なるチーム(3チーム)で授業をデザインし、模擬授業を行いました。終了後のアンケート(12名中11名から回答)では、「学生自身に考えさせる工夫がされていた(平均4.0)」、「授業内容は(研究科・文理・分野を)横断するものであった(3.9)」、「自分の将来に役立つ内容だった(3.9)」、「総合的に、自分にとって意味のある講義だった(4.0)」(いずれも4段階評定)など高い評価が得られました。自由記述からは、「全ての内容について配慮がされており、楽しい授業で自ら学びたいと感じる仕組みが大変良かったです」、「アクティブラーニングについて、アクティブラーニングで学ぶ、という入れ子形式になっていたことで、能動的に学ぶ、という新しい学習の仕方を体感できたように思います」、「授業は『大学で教えること』とされているが、経営管理の社会人学生にとっても身につけたほうがいいスキルや考え方が多かったと考える」、「今後大学で教えることがあった場合、このプログラムを受ける前よりも多角的な点から考えて授業を行えると思います」、「本講義は全体を通して『実践で使える知識』が非常に多く、将来何かしらの講師を目指す学生にとっては有用性の高い内容であったと感じています」といった様々な声が聞かれました。



(山田 剛史)



## 5. 他部局との連携

### (1) 医学教育・国際化推進センターとの連携

医学教育・国際化推進センターでは、2016年度から、文部科学省課題解決型高度医療人材養成プログラムとして「現場で働く指導医のための医学教育学プログラム(FCME)」(<https://www.k3kyoto.jp/fcme/>)を提供しています。このプログラムは、学生や研修医に対して指導経験のある医師を対象にしたもので、医学教育学全般の知識を習得することで、自身や自施設の教育活動を省察し、改善できるようにすることを目標としています。毎年、全国から10名程度の医師が参加し、年3回の参加体験型学習(3泊4日)、および月2回のWeb討論型学習(1回2時間)を通して1年間学びます。「医療・教育を『社会的共通基本』として捉え、暴走する新自由主義と正当に対峙する」など明確でユニークな思想・哲学をもち、医学教育学の理論にもとづく最新の内容・方法を具体化したプログラムです。本センターからは、必修科目の1つである「カリキュラム開発:カリキュラムを創る・壊す—自由な学びの場の構築」に、松下佳代教授が講師の一人として参加しています。また、LMSとしてPandAも大いに活用されています。

FCMEについては、今年度の全学教育シンポジウムのテーマ2「大学院教育・専門家教育の新たな潮流」の中で、プログラム責任者の錦織宏准教授が報告されました。また、この3年間の実績をもとに、現在、『現場で働く指導医のための医学教育学—基礎編(仮題)』が編まれており、近く刊行予定です。社会人の学び直しが、大学・大学院教育の大きな課題になっている現在、国内外で勤務する医師を対象に、Web授業と経験学習を組み合わせた密度の濃いプログラムを実現した例として、とても参考になる取り組みです。

なお、医学教育・国際化推進センターとは、教育アセスメントについても連携していますが、そちらについては、「IV. 教育アセスメント」をご参照ください。

(松下 佳代)



2018年度版ハンドブック

(<http://cme.med.kyoto-u.ac.jp/fcme/handbook.pdf>)



Web討論型授業の1コマ



## (2) 薬学部との連携

### ① 授業改善の支援

2018年度より、本センターは、京都大学薬学部における授業改善の支援に取り組んでいます。具体的には、今年度よりリニューアル開講となった、アクティブラーニングを取り入れた薬学部初年次科目「薬学研究SGD演習」(SGDはSmall Group Discussionの略)の授業に参加し、担当者にフィードバックを行う形で、実践的なFDに取り組んでいます。例えば、本センターからの提案により、授業の後半において、これまでの授業内容の振り返りを行う回が取り入れられました。また、次年度に向けて、授業の一部の「研究室訪問」をより有意義なものにするための提案もなされました。

授業の様子や、担当教員へのインタビューは下記からご覧になれます。

薬学部初年次科目「薬学研究SGD演習」授業レポート：<http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/sdg/>

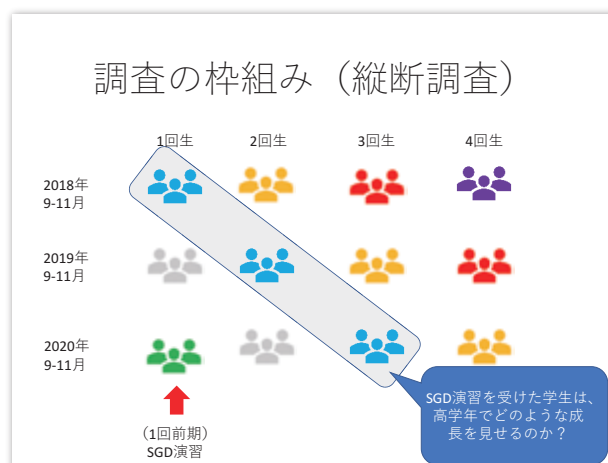
担当教員へのインタビュー：<http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/news/news-794/>



### ② 学生の学習・生活実態調査の支援

上記の授業改善の支援と関連して、学生の学習や生活の実態に関する調査・分析を本センターが主体となって進めています。調査では、京都大学薬学部の学生が普段どのように学習を行っているのかといった学習の側面から、研究マインド、教員との親密感や所属意識などまで、大学生の学習において近年重要視される幅広い指標を用いています。こうした結果を薬学部の教員・学生と共有することで、単なる分析に終始するのではなく、より効果的な教育・学習改善へと活かしていくことが期待されています。

(松下 佳代・長沼 祥太郎)



### (3)宇宙総合学研究ユニットとの連携

本センターと学際融合教育研究推進センター宇宙総合学研究ユニットとの連携は2016年度に始まりましたが、2018年9月からは3名の教員(飯吉透教授、松下佳代教授、田口真奈准教授)が宇宙総合学研究ユニットの併任教員に加わり、さらに連携を強めています。今年度は下記の活動を実施し、その成果報告は、2019年2月9・10日に開催された第12回宇宙ユニットシンポジウム「人類は宇宙社会をつくれるか?—宇宙教育を通じた挑戦—」にて行われました。

#### ①有人宇宙教育プログラムへの協力

宇宙総合学研究ユニットでは、宇宙飛行士の土井隆雄特定教授を中心として、「有人宇宙活動のための総合科学教育プログラムの開発と実践」(文部科学省宇宙航空科学技術推進委託費、2016～2018年度)の取組が進められています。このプログラムの目的は、宇宙に関わる高い専門性を持つ次世代人材の育成と潜在的な宇宙利用の拡大の両面に貢献することであり、全学共通科目「宇宙総合学」、ILASセミナー「有人宇宙学実習」、大学院横断教育科目群「有人宇宙学」が開講されています。

本センターは、この教育プログラムのカリキュラムや評価のデザインに協力しています。特に「宇宙総合学」と「有人宇宙学」については、授業評価として学生に対するフォーカスグループインタビューやアンケートの実施、また学習活動・学習評価としてコンセプトマップの作成(事前・事後)などを提案・支援しています。

#### ②パラボリックフライトを用いた微小重力環境における時空間認知を分析する研究教育活動

本活動は、宇宙総合学研究ユニット、霊長類研究所などとの連携による「パラボリックフライトを用いた微小重力下における社会的認知・認知進化に関する研究教育活動」(2017年度総長裁量経費)を継続して実施するもので、2018年10月6日、12月8日にパラボリックフライトが行われました。パラボリックフライトとは、航空機を放物線状に飛行させることで微小重力を体験できるもので、本活動は、このような重力環境の変化が、時空間認知能力や宇宙観・宇宙への関心などにどんな影響を与えるかを研究しています。

(田口 真奈・松下 佳代)



パラボリックフライトの様子



宇宙総合学の授業の様子

## 6. 高等教育研究開発推進センターウェブサイト

京都大学高等教育研究開発推進センターのウェブサイトが2017年度に完了し、今年度から本格的に始導しました。当サイトのクリエイティブコンセプトを「RE:EDit(リエディ)」とし、編集を軸にした情報発信、メディアのようなサイトを目指しています。

当ウェブサイトの特徴としては、教員の抱える悩みや教育改善の工夫などを集約し、より双方向的なものにしたいと考え、

①必要な人に必要な情報を届けるための情報設計

②発信した情報を元に、教員との交流を促しPDCAを回す仕組みを構築すること

が挙げられます。日本語サイトと同様の英語サイトも公開しており、京都大学の教員だけでなく、国内外の教育関係者にも広く見てもらうことができるようにしております。

実際に今年度4月末から12月までの閲覧状況は下記の図の通りです。アメリカやフランスなど海外からの閲覧者も一定存在していることがわかります。よく閲覧されているページとしては、コースデザインやカリキュラムデザインなどが挙げられます。参照元メディアとしては、グーグルやヤフーといった検索エンジンを使用していることがわかりました。



日本語版 <https://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/> 英語版は末尾に/en/

今後も京都大学の教員のみなさんが、オリジナルの教育手法について考える上でのきっかけとなるような情報を発信したり、また授業構成を考えるヒントを探す上で有益なベテラン教員のインタビュー記事を掲載したり、現代日本の高等教育について考えるフォーラム等の情報が見えるようなサイトとして、活用していただけるよう、アップデートしていく予定です。ぜひ、当ウェブサイトを訪ねていただき、ご質問やご要望、情報提供などいただけると幸いです。

(山田 剛史・岡本 雅子・川内 亜希子)

ウェブサイト閲覧数	
日本	15,261
アメリカ	451
フランス	246
中国	114
イギリス	102
韓国	97
イエメン	70
ロシア	62
台湾	48
イタリア	42



## Ⅲ. ICTの教育的活用

京都大学では、教育の質的転換を図るために、オープンコースウェア(OCW)やMOOC等、ICTを利用した教育の推進に積極的に取り組んでいます。本センターは本学のOCWやMOOCの制作や運用に関する担当部局としてこれらの教育コンテンツの公開や利用を行っています。また、センター内に設置された教育コンテンツ活用推進委員会や関連部局との連携を通じて、OCWとMOOCをはじめとするICT利用教育の推進や普及について継続的に協議を行い、その成果はCONNECT等を通じて広く発信しています。

### 1. オープンコースウェア(OCW)

#### (1) 京都大学OCWについて

2005年から始まった京都大学OCW(<https://ocw.kyoto-u.ac.jp>)は、学内で実際に利用している講義教材をインターネットで公開するプロジェクトです。学内の学生、教職員、他大学の学生、関連学会の研究者、京都大学を志願する高校生、さらなる学習を志す社会人など、あらゆる方々に門戸を広げ、京都大学の講義内容を知ってもらうことを目的としています。また大学教育の情報公開の一環として、全部局のシラバスをOCWで公開しています。今後も世界へ向けて、京都大学のビジビリティを高め、教育・研究から生まれた知識を広く社会に提供できるように、コンテンツを充実させていきます。OCWは、人類の知的資産への貢献とその共有を目指して、世界各国とのコミュニケーションを高め、国際交流を推進します。

対外的な交流としては、世界の300以上のOCW推進機関で構成されるオープンエデュケーションコンソーシアム(旧:国際オープンコースウェアコンソーシアム)、日本オープンコースウェアコンソーシアムに加盟しており、国内外でOCWを推進している大学や企業との交流をはかっています。

OCWで講義教材の公開を希望する本学の教職員の方は、OCWトップページの申込フォームをご利用ください。

#### (2) 公開している講義コンテンツ

2018年度時点で公開している講義数は822講義です。その内訳は、「通常講義」が348(日290、英53、仏5)、「公開講座」が326(日267、英57、仏2)、「国際会議」が75(日5、英57、仏13)、「最終講義」が73(日72、英1)となっています。部局別内訳は以下の表の通りで、京都大学の50部局以上がOCWを公開しており、OCWが学内に認知され積極的に利用されていることがわかります。

(藤岡 千也・酒井 博之)



京都大学オープンコースウェアのトップページ



OCWの公開数		※括弧内は、国際会議については英語以外の内数、それ以外は日本語以外の内数		
	通常講義	公開講座	国際会議	最終講義
国際高等教育院/全学共通科目	79 (英 8)	10		
総合人間学部/人間・環境学研究科	12 (英 1)	28 (英 19, 仏 2)	19 (仏 13)	8
文学部/文学研究科	12 (英 5)	3	1	1
教育学部/教育学研究科	11 (英 4)	22 (英 1)	2 (日 1)	5
法学部/法学研究科/法科大学院	6	6		
経済学部/経済学研究科	16 (英 2)	1		6
理学部/理学研究科	39 (英 18)	22 (英 5)		6
医学部/医学研究科	18 (英 3)	18 (英 3)	3	4
医学部附属病院		11 (英 2)		
薬学部/薬学研究科	3			
工学部/工学研究科	23 (英 1)	20	3	14
農学部/農学研究科	85 (英 8)	3 (英 1)		1
情報学研究科	6 (英 2)	1 (英 1)	1	6
生命科学研究科	31 (英 1)	7 (英 1)	2 (日 1)	
地球環境学舎・地球環境学舎	3	2		1
経営管理大学院	3	4	1 (日 1)	
アジア・アフリカ地域研究研究科				2
エネルギー科学研究科		1		2
総合生存学館/思修館			8	
化学研究所		1	1	2
人文科学研究所		3	2	1
ウイルス・再生医学研究所		5		
エネルギー理工学研究所		1		1
生存圏研究所		1		2
防災研究所		11		
基礎物理学研究所		4	2	2
経済研究所		4	1	
数理解析研究所		1		2 (英 1)
複合原子力科学研究所		4		
霊長類研究所		2		
東南アジア地域研究研究所		3 (英 1)	1	3
iPS細胞研究所		4		
学術情報メディアセンター		15	4 (日 1)	2
放射線生物研究センター		2		
生態学研究センター		3		
野生動物研究センター		2		
高等教育研究開発推進センター		8	9	1
総合博物館		3		
低温物質科学研究センター		1 (英 1)		
フィールド科学教育研究センター		17		
こころの未来研究センター		2		1
国際交流センター/研究国際部		5 (英 2)	9	
学生総合支援センター		1		
アフリカ地域研究資料センター		3		
白眉センター			1	
環境科学センター		1	1	
学際融合教育研究推進センター			1	
情報環境機構		4		
附属図書館		10		
物質-細胞統合システム拠点 iCeMS		21 (英 16)		
安寧の都市ユニット		4		
アートサイエンスユニット		4 (英 1)		
デザインスクール				
未来創成学国際研究ユニット		2	2 (日 1)	
産官学連携本部		2		
教育推進・学生支援部		2		
総務部総長室		8 (英 3)		
京都大学生協学生委員会		1		
企画・情報部		1	1	
ELCAS		1		

その他 ● 渉外部広報・社会連携推進室:「入学式・総長式辞 (35)」、「京都大学大学紹介 (4 (日1, 英1, 中1, 韓1))」  
● 学務部:「ジュニアキャンパス紹介 (8)」

## 2. KyotoUx:大規模オープンオンライン講義(MOOC)

### (1) 京都大学におけるMOOC

京都大学は、MOOC(Massive Open Online Courses:大規模オープンオンライン講義)プラットフォームのedX(<https://www.edx.org>)を通じ、全世界に向けて英語による無償のオンライン講義を配信しています。OCWと異なり、MOOCは大学の講義と同様に、開講期間中に毎週講義コンテンツが追加され、課された問題や試験に解答しながら、一定の成績を満たした受講者<sup>1</sup>には修了証が発行される点が特徴で、高等教育の新しい講義提供方法として世界的に大きな注目を集めています。edXは、ハーバード大学とマサチューセッツ工科大学が中心となり設立された、世界トップクラスの大学や教育機関で構成されるMOOCの大学コンソーシアムで、京都大学は世界トップレベル53校から成るチャーター校として日本で初めて参加し、「KyotoUx」という名称で講義を配信しています(図1)。

本センターはMOOCの制作、運用、分析・評価を担当しており、2017年度は12講義開講しましたが、2018年度は新規1講義を含む11講義を開講しました(表1、図2)。

今年度、新規に開講した「Culture of Services: Paradox of Customer Relations」は、山内裕経管理大学院准教授による「サービスの文化」をテーマとした講義で、同准教授が過去に提供した8週間の講義コンテンツ(講義ビデオ・課題を含む)を再構成し、文化的視点からサービスのデザインを捉える新たなトピックが加わるなど、多くの講義ビデオが新たに制作・追加されました。

また、デルフト工科大学(DelftX)が提供する講義「Sustainable Urban Freight Transport: A Global Perspective」において、本学の谷口栄一名誉教授とAli Qureshi工学研究科准教授が講師として1週間分の講義を担当しました。講義ビデオは、本学のMOOC制作スタッフが撮影し、デルフト工科大学に提供したもので、本講義はedXの加盟校と連携した初のケースとなりました。

上記のほか、再開講を含め多くの講義が受講登録可能ですので、ご自身の興味や関心に応じてアクセスしてみてください。また、KyotoUxのFacebookページ(<https://www.facebook.com/kyotoux/>)にも、配信講義に関する最新情報を随時提供していますので、ぜひご覧ください。

注1:受講者が修了証を得るためには有償(現在は\$49)のVerified Trackに登録する必要があります。

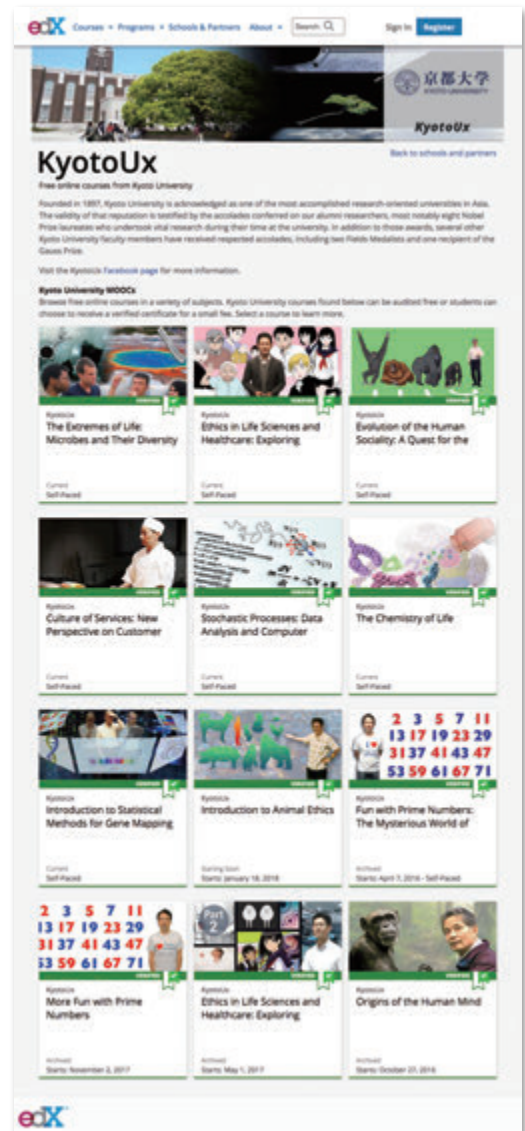


図1 edXのサイト(KyotoUxからの提供講義)

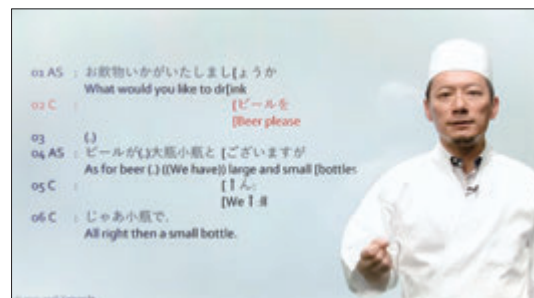


図2 2018年度新規講義「Culture of Services: Paradox of Customer Relations(山内裕准教授)」

表1 2018年度開講講義				
開講時期	講義名	講義担当者	配信期間*	備考**
4月5日～ 2019年3月28日	The Chemistry of Life	上杉 志成 教授 (物質-細胞統合システム拠点/化学研究所)	15週 Self-paced	5回目
4月5日～ 2019年2月28日	Introduction to Statistical Methods for Gene Mapping	山田 亮 教授 (医学研究科)	4週 Self-paced	JGP 4回目
4月12日～ 6月7日	Culture of Services: Paradox of Customer Relations	山内 裕 准教授 (経営管理大学院)	8週 Self-paced	新規
5月17日～ 2019年3月14日	Introduction to Animal Ethics	伊勢田 哲治 准教授 (文学研究科)	5週 Self-paced	JGP 2回目
5月17日～ 2019年3月14日	More Fun with Prime Numbers	伊藤 哲史 准教授 (理学研究科)	5週 Self-paced	JGP 2回目
10月1日～ 2019年8月29日	Culture of Services: Paradox of Customer Relations	山内 裕 准教授 (経営管理大学院)	8週 Self-paced	2回目
10月1日～ 2019年8月1日	Stochastic Processes: Data Analysis and Computer Simulation	山本 量一 教授 (工学研究科)	6週 Self-paced	JGP 3回目
10月18日～ 2019年8月1日	Ethics in Life Sciences and Healthcare: Exploring Bioethics through Manga	児玉 聡 准教授 (文学研究科)	5週 Self-paced	JGP 4回目
12月6日～ 2019年9月26日	Evolution of the Human Sociality: A Quest for the Origin of Our Social Behavior	山極 壽一 総長	6週 Self-paced	3回目
12月6日～ 2019年9月26日	Extremes of Life: Microbes and Their Diversity	跡見 晴幸 教授 (工学研究科)	4週 Self-paced	JGP 4回目
2019年2月28日 ～2020年2月20日	Origins of the Human Mind	松沢 哲郎 特別教授 (高等研究院・霊長類研究所)	5週 Self-paced	2回目

\*配信期間欄の "Self-paced" は、開講時にすべての講義コンテンツが公開され、講義終了までに受講者自身のペースで学習を進める講義形態です。  
 \*\*備考欄の "JGP" はスーパーグローバル大学創成事業「京都大学ジャパンゲートウェイ (JGP)」からの提供講義です。これらの講義は本事業の助成を受け開講しています。  
 また、回数は再開講を表しています。

## (2) コースカタログの制作

京都大学が提供するMOOCに関して、学内の教職員に対する周知や普及促進をはかるため、これまで制作・公開してきた講義内容や関連する情報を集約し、読者がその全体像を俯瞰できるようなツールとしてコースカタログ「Learn on the Planet」を制作しています(図3)。新規開講の講義を追加した2018年度版のコースカタログを提供していますので、MOOCに興味をお持ちの方、MOOCで講義を配信してみたい方はぜひご一読ください。下記のURLよりPDF版もダウンロードできます。



図3 コースカタログ(抜粋)

<https://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/connect/resources/kyotoux.php>



### (3)MOOCの制作・運用について

MOOCの制作や開講期間中の運用、担当教員に対する事後のフィードバックについて、本センターの担当スタッフが支援を行っています。

講義を担当する教員の決定後、本センターの担当スタッフとの打合せを通じ、講義のタイトルや内容、構成等を決めていきます。その後、講義の内容や魅力を伝える講義紹介ビデオを制作しedXから公開します。紹介ビデオは講義開始の数ヶ月前に公開し、講義開始までに受講者を募ります。

講義開始までに、スライド等の教材や問題の作成など講義コンテンツの制作を進めていきます。講義ビデオの撮影・編集や講義で課す課題の作成についても専門スタッフが支援します(図4)。

講義担当教員の目的や要望に合わせ、様々な講義素材を制作することが可能です。講義ビデオは主に学内の撮影スタジオで収録しますが、プレゼンテーションスライドを活用できる大型電子パッドや画像合成技術を用いた教材など、多様な形態で作成できます(図5)。また、スタジオ内の撮影だけでなく、実験風景やフィールドワーク、インタビュー、ゲスト講師によるミニ講義、アニメーションの制作など、講義に必要な教材の制作支援も行います(図6)。

MOOCで扱う小テストや最終試験等の課題は、自動採点が行われます。そのため、これまで大学の中で行ってきた成績評価の方法をそのまま使うことが困難な場合も多くあります。レポート等の自由記述課題を受講者同士で相互に採点するピアアセスメントの利用など、講義の目的に合わせた課題設定の提案も行っています(図7)。

講義中の受講者の学習支援は、主に講義ごとに設置された掲示板を通じて行います。技術面や講義配信シ

ステムに関する質問はセンターのスタッフが対応しますが、講義内容の質問については、専門分野の知識を持つTAを雇用し対応するとより効果的です。また掲示板は受講者同士の学び合いや議論・交流の場としても活用されています。

講義の配信期間終了後、制作チームと教育アセスメント室のスタッフとで、担当教員に対するフィードバックの機会を設けています。受講状況やアンケート結果をフィードバックすることにより、再開講時に向けた教材の改善等に結びついています。

本センターでは、講義の目的と講義素材の組み合わせによる学習効果についても研究し、より教育効果の高い素材の制作を目指しています。



図4 専門スタッフによるMOOCのビデオ制作支援・スタジオでの撮影の様子

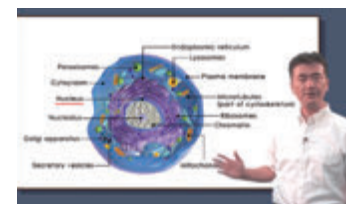
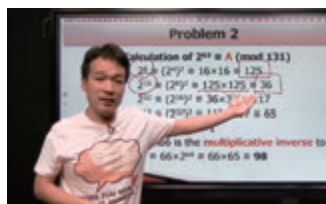


図5 講義スタイルに合わせた講義ビデオの作成

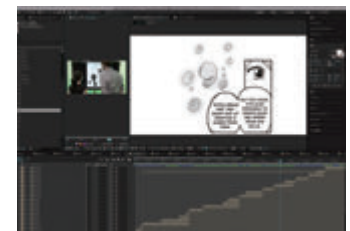
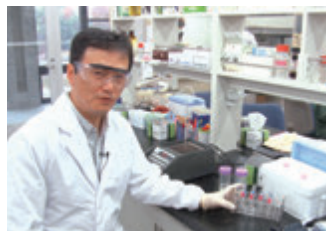


図6 講義素材の制作支援(例:実験風景・アニメーション制作)

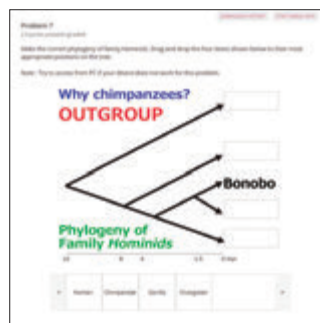


図7 多様な課題作成ツール

(酒井 博之・岡本 雅子・Nikan Sadehvandi)



### 3. KoALA:学内向けオンライン講義(SPOC)

#### (1)SPOCとは

MOOCが世界中の学習者に開かれたオンライン講義であるのに対し、MOOCと同様のツールや仕組みを利用し、各大学が自学の学生向けに提供するオンライン講義・教材・学習環境を総称してSPOC(Small Private Online Courses)と呼び、世界的に注目が集まっています。

SPOCでは、各大学固有の目的やニーズに応じた講義や教材を制作し、特定の授業の受講者に向けてオンライン講義を提供したり、学内の他の教育プラットフォームとの相互接続による学習データの分析や活用が可能となります。SPOCの利用により、反転授業や予復習のためのオンライン教材を提供したり、課題作成ツールにより理解度を確認するなど、学生が学習を進めるにあたって多くのメリットがあります。学内の授業でSPOCを導入することにより、学生の主体的・能動的学習を加速・後押しすることができ、またオンライン講義・教材作りに関わる教員や利用する学生が増えることでSPOCやMOOCの質的向上や量的増大にも繋がることが期待されます。

#### (2)KoALAの開発と試行

本センターでは、edXのプラットフォームがオープンソース化された「Open edX」を利用し、主に京都大学の学生・教員が授業内外で利用することを目的として2016年度に「KoALA(コアラ)」を試験的に導入し、2018年度より正式に運用を開始しました(図1)。学内の正課の授業での活用のほか、個別のニーズに応じて一部の講義は一般公開を行っています。KoALAでは日本語でも講義コンテンツを制作・提供することができます。



図1 KoALAの画面例(左:トップページ右:講義紹介ビデオより)



### (3)2018年度開講のSPOCについて

2018年度は、2017年度に試行的に行った2講義の再開講を含め、表1に示す講義をKoALAより提供しました。

学内の正課の授業に関しては、下田宏エネルギー科学研究科教授による「電気電子回路入門」をはじめ4件のオンライン講義が対面授業の代替などとして活用されました。電気電子回路入門を受講した本学の学生からは、

- 理解できなかった箇所を講義ビデオで繰り返し視聴できる
- 講義ビデオの視聴速度を上げることにより効率よく学習できる
- じっくり考えたいときに講義ビデオを一時停止できる
- 試験前の復習のために活用できる

などの高評価を得ています。引き続き、対象とする学年や分野が異なる授業でSPOCを提供し、それぞれの条件における学習効果の向上や教員の授業負担の軽減等を検証していく予定です。

今年度の提供講義の中で、北野正雄教育担当理事・副学長による「音波入門－音波の不思議を探る－」は、音波に関する実験映像を通じ、音には高校の物理で学ぶ内容とは異なる側面があることを体験的に学習することを目的として提供しています。また、「ベクトルから行列へ－線形性とは何か－」は、ベクトル・行列の分野に関する初年次向けの教材として国際高等教育院数学教室と本センターが共同開発し、本学のOCWを通じてすでに提供しているコンテンツです。当初より講義ビデオに加えて問題群も提供されており、KoALAからの一般公開講義として新たに配信しています。

本センターでは、これまでMOOCで培った経験やノウハウを踏まえ、今後も学内の正課の授業での活用を中心に、部局や教員のニーズに応じた一般公開のコンテンツも含めてSPOCの開発を進めます。

KoALAでのオンライン講義の制作・提供に関心のある方は、下記までご連絡ください(本学教職員限定)。

- KoALA担当: koala@highedu.kyoto-u.ac.jp

(酒井 博之・岡本 雅子)

開講時期	講義名	講義担当者	配信期間*	備考
4月28日～ 2019年3月28日	オオサンショウウオ先生の医療統計セミナー －臨床試験・メタアナリシス・疫学研究－	田中 司朗 医学研究科特定教授	4週 Self-paced	2回目
5月10日 ～8月2日	国際政治経済学	坂出 健 経済研究科准教授	7週 Self-paced	2回目
6月6日～ 13日	電気電子回路入門	下田 宏 エネルギー科学研究科教授	1週	正課(B2)
7月4日～ 2019年1月10日	ベクトルから行列へ－線形性とは何か－	三輪 哲二 国際高等教育院特定教授 ほか	Self-paced	OCW 再利用
7月10日～ 18日	電気電子回路入門(7/11-17)	下田 宏 エネルギー科学研究科教授	1週	正課(B2)・ 追加分
10月8日 ～11月5日	初修物理学B	下田 宏 エネルギー科学研究科教授	1週	正課(B1)
10月24日 ～31日	システム安全学	下田 宏 エネルギー科学研究科教授	1週	正課(M)
2019年1月24日 ～8月1日	音波入門－音波の不思議を探る－	北野 正雄 教育担当理事・副学長	Self-paced	

\*配信期間欄の"Self-paced"は、開講時にすべての講義コンテンツが公開され、講義終了までに受講者自身のペースで学習を進める講義形態です。

#### (4) 高校生を対象としたオンライン講義の開発

本センターでは、2018年度、高校生を対象としたオンライン講義を開発し、KoALA上で公開しました。

京都大学では、「高校生向けの知的卓越人材育成プログラム(ELCAS)」をはじめ、多くの高大接続を推進する試みが行われてきました。それらの試みには、意欲の高い優秀な高校生がこれまでに多く参加しています。しかしながら、遠方に住んでいる場合、実際に大学に足を運ぶことが難しい、あるいは、開講時期が限られているといった、空間的・時間的制約もまた存在していました。その課題を克服すべく、本センターでは、高大接続・入試センターおよび学際融合教育研究推進センター・高大接続科学教育ユニットとの連携による2018年度総長裁量経費採択事業「SPOCを活用したELCASの拡充と京都大学OCW再利用を通じた高大接続の推進」の一環として、主に以下の3点の取り組みを行いました。

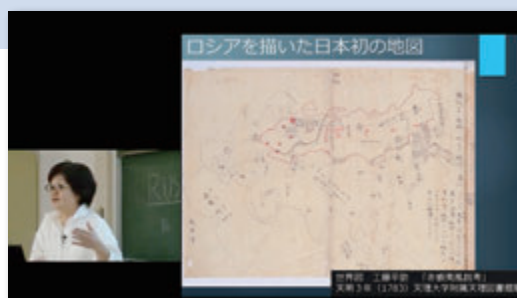
- 1 ELCASの提供する質の高い教育プログラムを「いつでも・どこでも」受講可能にする仕組みを開発し、試行的に講義の制作・提供を行うこと
- 2 OCWを通じて既に多く蓄積されている教育コンテンツの一部を再利用しSPOC教材化することによって、高校生向けの教育提供をより一層拡充すること
- 3 1と2の実践・利用事例を、京都大学の高大接続のためのポータルサイト「KNOT」を通じて学内外に発信すること

#### ELCAS開講式の講義をもとにしたコース開発

##### JAH001 「江戸時代の人びとは世界をどのように見ていたのだろうか」

制作 岩崎 奈緒子 教授(京都大学総合博物館)

概要 江戸時代の人びとがどのように世界を見ていたのか、その世界に対する認識が変化する過程を、同時代の地図や出版物をもとに検討する。江戸時代の世界図を概観し、ロシアが描かれた日本初の地図の出現とそれに基づく人びとの世界観の相対化について議論する。



##### TCB001 「樹木の生命力」

制作 高部 圭司 教授(農学研究科)

概要 なぜ樹木が長命で巨大な生命体になり得るのか、なぜ優れた生命力を有しているのかについて、他の生物との比較による樹木の特徴や、セルロース・ヘミセルロース生合成・堆積およびリグニンの生合成・沈着といった樹木の細胞の構造・形成を中心に議論する。

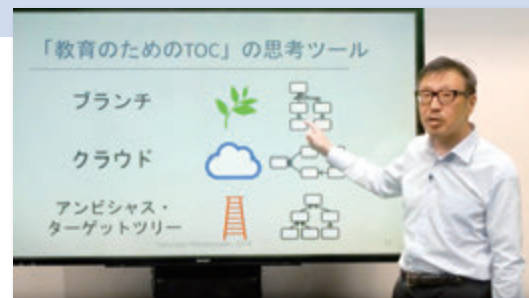


**文系コースの新規開発**

- CRT001 「考える方法を学ぶ:クリティカルシンキング入門1 ブランチ」**
- CRT002 「考える方法を学ぶ:クリティカルシンキング入門2 CLR」**
- CRT003 「考える方法を学ぶ:クリティカルシンキング入門3 クラウド」**
- CRT004 「考える方法を学ぶ:クリティカルシンキング入門4 アンビシャス・ターゲット・ツリー」**

制作 若林 靖永 教授(経営管理大学院)

**概要** よりよく考えるための方法であるクリティカルシンキング(批判的思考)について学習する。具体的には、ブランチ、クラウド、アンビシャス・ターゲット・ツリーという思考ツールについての学習を通して、行動や事象間の因果関係や対立関係を理解したり、戦略的な行動計画をつくれるようになることが目的である。



- FIM001 「フィールド医学への誘い1:日本からブータンへ」**
- FIM002 「フィールド医学への誘い2:人間の健康としあわせ」**

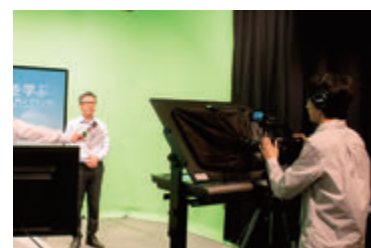
制作 坂本 龍太 准教授(東南アジア地域研究研究所)

**概要** 疾病、老化のありさまを、自然環境、文化背景との関連でもう一度、捉えなおそうとする研究領域であるフィールド医学について、ブータンでのケーススタディを中心に議論する。また、フィールド医学を通して、人間の健康としあわせとの関係についても考える。



こうしたコースを用いて、反転授業を実施することが可能です。2019年度には、北野正雄教育担当理事・副学長によるオンライン講義「音波入門—音波の不思議を探る—」の受講者ならびに若林靖永経営管理大学院教授によるオンライン講義「考える方法を学ぶ:クリティカルシンキング入門1・2」の受講者を対象とした半日のワークショップを開催予定です。

(河野 亘・鈴木 健雄・長谷 海平・田口 真奈・松下 佳代)



スタジオでの撮影の様子



## 4. 教育コンテンツ活用推進委員会

### (1) 委員会について

教育コンテンツ活用推進委員会(以下、「本委員会」)は、OCWとMOOCの活用推進と運用およびサービスに係わる事項の協議・検討、連絡および調整を行うために、2015年度に立ち上げられました。この「OCW・MOOC等のインターネットを活用した教育の推進」は、京都大学における教育の質的転換を図るための方略として、その「改革と将来構想」や「第3期中期目標・中期計画」において、大学の機能強化の方向性に応じた取り組みとして掲げられているものです。

本委員会の委員は、授業科目を提供する全ての部局や情報環境機構・学術情報メディアセンター等の代表者で組織されています。

教育コンテンツ活用推進委員会委員リスト	
<b>委員長</b>	<b>2号委員(続き)</b>
飯吉 透 (高等教育研究開発推進センター長)	東長 靖 (アジア・アフリカ地域研究研究科教授)
<b>2号委員</b>	川嶋 宏彰 (情報学研究科准教授)
飯吉 透 (高等教育研究開発推進センター長)	吉村 成弘 (生命科学研究科准教授)
酒井 博之 (高等教育研究開発推進センター准教授)	河合 江理子 (総合生存学館(思修館)教授)
田口 真奈 (高等教育研究開発推進センター准教授)	西前 出 (地球環境学堂・学舎准教授)
児玉 聡 (文学研究科・文学部准教授)	山内 裕 (経営管理研究部・経営管理教育部准教授)
西岡 加名恵 (教育学研究科・教育学部教授)	喜多 一 (国際高等教育院教授)
原田 大樹 (法学研究科・法学部教授)	<b>3号委員</b>
坂出 健 (経済学研究科・経済学部准教授)	梶田 将司 (情報環境機構教授)
伊藤 哲史 (理学研究科・理学部准教授)	飯山 将晃 (学術情報メディアセンター准教授)
錦織 宏 (医学研究科・医学部准教授)	<b>4号委員</b>
金子 周司 (薬学研究科・薬学部教授)	外村 孝一郎 (企画・情報部 情報基盤課 教育用システム管理掛長)
山本 量一 (工学研究科・工学部教授)	<b>5号委員</b>
平井 伸博 (農学研究科・農学部教授)	呑海 和彦 (教育推進・学生支援部 教務企画課課長補佐)
西山 教行 (人間・環境学研究科・総合人間学部教授)	
下田 宏 (エネルギー科学研究科教授)	(委員の役職等は2018年7月1日現在)

### (2) 開催日と議題について

2018年は、3月8日と12月10日に会議が開催されました。2017年度第3回にあたる3月8日の会議では、本委員会のもとで構築してきた、京都大学の高大接続を推進するためのポータルサイト「KNOT」の構築状況が審議されました。また、MOOCの提供スケジュールや、学内版MOOCプラットフォーム(SPOC)であるKoALAの運用開始、CONNECTの更新・閲覧・改修状況、PandA連携ワーキンググループの活動について報告がなされました。また会議終了後には、学内ワークショップ「ICT活用について考える」(p.28)が開催されました。

2018年度第1回にあたる12月10日の会議では、MOOC、KoALA、OCW、CONNECT、KNOT、それぞれの進捗・依頼・更新状況について報告がありました。合わせて、次年度以降に実施予定のOCWのサイトリニューアルに関する、意見・要望の呼びかけや、KNOT開設後の反響について報告がありました。最後にPandA連携ワーキンググループの活動と、PandAのコースサイトの開設状況に関して審議がなされました。

#### PandA連携ワーキンググループについて

PandA連携ワーキンググループ(WG)は、教育コンテンツ活用推進委員会の2017年度第1回会議の場で発議され、議論を経て同委員会の下に設置が認められたものです。

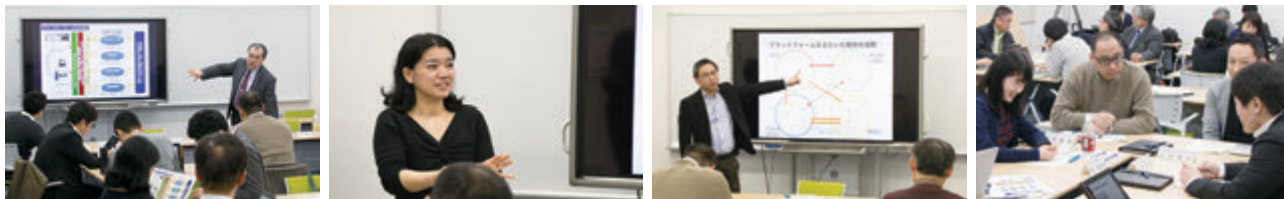
PandAとは情報環境機構が、京都大学の全学に対して提供するLMS(学習管理システム)のことです。PandAなどのLMSは個々の授業を支援するために様々な機能をもっていますが、それぞれの教員の活動は各コース用のサイトの中で行われます。このためPandAの利用率が高まる一方で、個々の教員のユースケースの把握が難しいという現状がありました。

このような状況に鑑みて、OCWやMOOCの利用促進の観点から、PandAの利活用の実施状況やグッドプラクティス、利用上の課題などを探るとともに、利用者にPandA、OCW、MOOCの利用促進のための情報を発信することを目的に設置されました。

このWGでは本センターと情報環境機構が協力する形でPandA利用のためのコンテンツの整備などを行っています。

### (3)学内ワークショップ「ICT活用について考える」の開催について

2018年3月8日、教育コンテンツ活用推進委員会主催の教職員向けワークショップ「ICT活用について考える」(正式名称:「部局・教員・学生のニーズに合わせた教育・学習支援のためのICT活用について考える」)を開催しました。学内13部局から23名の教職員が参加し、OCWやMOOC、KoALA、PandAといった京都大学が運用・管理する教育向けICTツール・プラットフォームを、実際の教育・学習支援にどのように活かすことができるか、また導入の際にどのような課題があると思われるかについて議論しました。



**プログラム** 司会：田口 真奈 高等教育研究開発推進センター 准教授

話題提供1

11:45 ~ 11:50 「本学における SPOC・MOOC・OCW・LMS 活用の概要」

飯吉 透 高等教育研究開発推進センター センター長・教授

話題提供2

11:50 ~ 12:05 「学内における教育コンテンツの活用事例について-SPOC を中心に-」

酒井 博之 高等教育研究開発推進センター 准教授

グループワーク

12:05 ~ 12:45 「部局・教員・学生のニーズに合わせた教育・学習支援のための ICT 活用について考える」

本ワークショップでは、まず、本センターの飯吉透センター長・教授より、SPOC・MOOC・OCW・LMSの活用方法について話題提供がありました。京都大学でどのようなICT活用教育のための基盤が整備されているかが紹介されたうえで、それらICTを既存の講義の中で補完的に使うだけでなく、高大接続、リカレント教育との接合、留学生に対する教育的な手当て、事前学習といったことが考えられる旨が紹介されました。さらに、今日の世界的潮流として、授業単位や講義単位の中でのBlendedな学習だけでなく、単位や学位といった制度の中でのBlendedな運用の可能性があるという展望が示されました。

次に、本センターの酒井博之准教授から、学内における教育

コンテンツの活用事例について説明がありました。これまでに「KyotoUx」からMOOCを配信された先生方が、どのような形でMOOCを活用されているかの事例が紹介された後、KoALAをはじめとするSPOCとMOOC、OCW、京都大学情報環境機構が管理するLMSのPandA、それぞれの特徴と相違点について整理がありました。

グループワークで参加者は、「各部局の教育的課題のうち、ICTを使って解決できそうなものはあるか」「解決できるかもしれないとして、課題はどこにありそうか」の2点について議論しました。後半、各グループの議論の共有と全体討論を経て、1時間に及ぶワークショップは終わりました。

#### グループワークで出た意見の抜粋

##### 【MOOCについて】

- 動画を撮影し、字幕を付けてという様子を見てみると、MOOCはハードルが高く感じられる。また、作ってからでも、MOOCを使うとどういうメリットがあるかが分からないとなかなか普及しないのでは。
- (上の意見に対する応答として)MOOCの活用方法としては、実際に全ての講義で反転授業用の教材として利用している例がある。
- 普及という観点からいうと、留学生は大学院受験や予習用にMOOCを受講している事例も多い。そのため、日本人学生への普及が課題であろう。一度調査してみたらどうか。

##### 【KoALA(SPOC)について】

- KoALAの場合、MOOCに比して制作面でのハードルが低く感じられる。ただ、仮に動画を撮影する場合、居室だと音で中断されることもあり、貸しスタジオや機材のレンタル等があると便利だ。また、ディスカッションが盛り上がりがない場合があり、それが課題だ。

- (上の意見に対する応答として)貸しスタジオは、学内のある建物内に自由に使えるところがあったはずだ。編集方法やセットアップの方法に関して、ノウハウ集があると便利だろう。また、ディスカッションを機能させるには、成績と絡めるというのが有効だ。また、そこでお互いに議論することの価値を身につけてもらうために、教員が方向づける必要がある。

- KoALAの手軽さを考えると、学生の教育の一環として、学生主体で作られたKoALAのコースというのも面白いのでは。

- ほぼ全ての授業を英語で実施している研究科からすると、日本人学生のサポートという点で、予復習教材をKoALAで作り、それを利用してもらうというのは有効かもしれない。
- MOOCにもいえることだが、推薦入試でも使うことができたら面白いだろう。

##### 【OCWについて】

- 高校生に京大OCWを見せると、熱心に見てくれる。高校生の方がニーズがあるのかもしれない。
- (ある参加者の場合、)学部/研究科の事情により、授

業でICTを用いることは少ないが、今後もオープンキャンパスのOCW化等は続けていきたい。

##### 【PandAについて】

- 報告書のような重いデータをアップロードでき、また提出状況も確認できるということで、現在PandAを積極的に使っている。案内や要望をすぐに共有できるのもメリットの一つだ。
- 受講生が多い場合、リプライとフィードバックの手間が膨大になり、大変だと感じることがある。
- (上の意見に対する応答として)現在、リプライやフィードバックを楽にする新しい技術をテスト中のため、少し待ってほしい。

##### 【その他】

- 教育コンテンツを一から作ることは大変なため、学外のコンテンツを利用するののも一つの手だと考えるが、何か良い方法はないか。
- 著作権の問題からKoALAに外部コンテンツを取り込むことはできないが、例えばPandAにリンクを貼って、該当するコンテンツに飛ばすという方法が考えられる。

(鈴木 健雄・河野 亘・田口 真奈)

## 5. MOST(オンラインFD支援システム)

### (1) MOSTについて

MOST (Mutual Online system for Teaching & Learning) (<https://most-keep.jp/>)は、全国の大学の教職員、将来大学教員を目指す大学院生を対象にしたオンラインFD支援システムです。提供が開始された2009年11月から2019年1月までの間に、870名の方にご参加いただき、スナップショット数で3,538件、コミュニティ数では104件を数えるまでに至りました。MOSTの登録者は、スナップショットと呼ばれるポートフォリオを作成・共有・公開することで情報交換します。

### (2) MOS宝

ポートフォリオを共有するMOSTに加え、2015年度からは、大学での授業改善や教育改善のためのノウハウやツール、アイデアなどの具体的な授業内容までを共有するMOS宝(モストレジャー) (<https://most-keep.jp/treasure/>)を開発し、MOSTを補完するシステムとして運用しています。MOSTユーザーであればコンテンツが作成でき、作成されたコンテンツは誰でも閲覧可能です。MOS宝に投稿されたコンテンツは、既存のMOSTコンテンツであるスナップショットとリンクすることが可能で、専門領域や対象学年が異なる場合でも教育に関する実践知を共有することが期待できます。

### (3) MOSTフェロースhipプログラム

本センターでは、MOSTの活動を推進・活性化させるため、全国の大学教員を対象とし、MOSTを利用した授業実践の見直しや教育改善の活動に取り組む「MOSTフェロースhipプログラム」を2012年度に開始しました。今年度も選定された10名が活動を進めています。MOSTフェローに関する情報は、下記のURLよりご覧になれます。

[http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/most\\_fellow/](http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/most_fellow/)

MOSTフェローは、フェロー同士で活動のプロセスや成果を共有しながら、各自の教育実践を改善するとともに、教員コミュニティとしての成長も目指します。年度末の3月に、(1)大学教育研究フォーラムでの発表、(2)自身の取り組みのスナップショット(コースポートフォリオ)の作成と公開、の2点が本プログラムの活動成果となります。この間に行われる2度の対面ミーティングについて、次に紹介します。

### (a) 第1回ミーティング

2018年3月22日に第1回ミーティングが京都大学で開催されました。このミーティングでは、各フェローの自己紹介や実践紹介を行い、活動の第一歩を踏み出します。

また、ミーティングの前日、第6期MOSTフェローの修了式が行われ、本プログラムを終了した9名のMOSTフェローに修了証が授与されました。第6期MOSTフェローの成果であるスナップショットは以下のURLで閲覧可能です。

[https://most-keep.jp/most/gallery-most\\_fellow\\_06/](https://most-keep.jp/most/gallery-most_fellow_06/)

### (b) 第2回ミーティング(合宿)

2018年8月26日～27日、名城大学名古屋ドーム前キャンパス社会連携ゾーンshakeにおいて、第2回ミーティングが合宿形式に



写真1 MOSTフェロー合宿の様子

で開催されました。この合宿では、前期に取り組んだ各自の授業実践について、作成途上のコースポートフォリオ等を用いて活動報告が行われました。この合宿には、歴代フェローも参加し、期を越えた交流を持ちました。

### (4) MOSTフェロー発表会

第24回大学教育研究フォーラムにおいて、MOSTフェロー発表会「MEGA CRISIS 巨大危機 IN CLASSROOM～脅威と闘う教員たち～」が実施されました。こ



写真2 MOSTフェロー発表会の様子

では、MOSTフェローのこれまでの教育経験や多様な実践知を踏まえ、授業や教育実践の中で実際に起こった「クライシス」を題材に、グッドプラクティスだけでなく、失敗事例や未解決の難題を紹介し、様々な困難をどのように乗り越えていけばよいのかについて、具体的な事例を用いた問題が提起され、解決方法が提案されました。

MOSTフェロースhipプログラムは、今後も活動を継続していく予定です。本学教員からの応募もお待ちしております。

(岡本 雅子・田口 真奈・酒井 博之・飯吉 透)



## 6. ICT活用教育のためのポータルサイト(CONNECT)

本センターでは、2017年度より、教育コンテンツ活用推進委員会(p.27-28参照)のもと構築したICTを活用した教育を推進するためのポータルサイト(CONNECT: CONtents for Next Education and Communication with Technology)を運用しています(図1)。

CONNECT: <https://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/connect/>



図1 CONNECT トップ・ページのイメージ

### (1) CONNECTの概要と特徴

CONNECTは、京都大学の教職員に向けて、ICTを利用した教育コンテンツを制作・活用するための情報を提供するものです。京都大学では、これまでMOOCやSPOC、OCW\*、PandA\*\*といったICTを利用した教育コンテンツやプラットフォームを全学として整備・運用してきました。そのうち、本センターではMOOC、SPOC、OCWの制作・運用を担当しています。ただ、これら多様なICTコンテンツ・プラットフォームの存在の一方で、それらを制作・活用する上で必要となる情報をまとめたウェブサイトは、本サイトが公開されるまで存在しませんでした。

CONNECTはこれらの情報を一つのウェブサイトにとまとめ、目的別に適切なサイトへと誘導するポータルサイトです。また、外国人教職員がアクセスしやすいように、日英両言語に対応しています。

\* MOOC(p.20-22)、SPOC(p.23-26)、OCW(p.18-19)については、それぞれの該当ページをご覧ください。

\*\* PandAは京都大学情報環境機構が全学に提供している学習支援システム(LMS: Learning Management System)です。

### (2) 2018年度の公開・更新状況と新着記事抜粋

2018年度は、インタビュー記事や、ICT活用教育に関する国内外の動向を紹介した記事をはじめ、各種記事・ページを計15回にわたって新たに公開・更新しました。その一例として、上杉志成化学研究所・iCeMS教授のインタビュー記事(図2)や、複数のMOOCコースからなる一つのプログラムであり、現在、大学・大学院の正規の課程内にも組み込まれつつある「MicroMasters」の紹介記事(図3)などがあります。



図2 上杉志成化学研究所・iCeMS教授インタビュー記事



図3「MicroMasters」紹介記事



### (3)コンテンツについて

「Topics」というページでは、インタビュー記事や、ICT活用教育に関連したイベントの開催報告記事が公開されています。インタビュー記事では主に、京都大学のなかで、ICTを用いて特徴のある授業を行っている教員に話を聞いています。どんなICTを、なぜ授業に導入したのかや、その効果といった点のみならず、授業にかける思いや、苦労を通じて感じた手応えといった、経験者だからこそ語ることのできる話が盛り沢山です。「Topics」ページには、他にも、ICT活用教育に関する国内外の動向を紹介する「Trends」というコーナーがあります(図4)。

The screenshot displays the 'Topics' page layout. It is divided into three main columns. The left column, titled '教員インタビュー' (Faculty Interviews), lists ten interviews with faculty members, each featuring a small photo and a text box describing their approach to ICT in education. The middle column, titled 'イベント 開催報告' (Event Reports), lists eight reports on various events, including MOOC events, international symposiums, and workshops, each with a photo and a brief description. The right column, titled 'Trends : 最新の ICT 活用教育動向' (Trends: Latest ICT Education Trends), lists eight articles and a special collection, each with a title and a date. A small thumbnail of the website's main page is visible on the far right.

図4 コンテンツの抜粋

ICTを使って特徴のある授業実践をされている先生の情報をお待ちしております。「お問い合わせフォーム」からご連絡ください。

(鈴木 健雄・河野 亘・田口 真奈)

## 7. 高大接続を促進するためのポータルサイト(KNOT)

2018年7月1日、本センターは高大接続を促進するためのポータルサイト(KNOT: Kyoto University Nexus for Open educational Treasure)を公開しました。同サイトは、教育コンテンツ活用推進委員会(p.27-28参照)のもと構築されたものです。その開発にあたっては、2017年度総長裁量経費の支援を受けております。

### (1)KNOTの概要と特徴

KNOTでは、京都大学が保有するオープンコンテンツのうち、高校生の使用に適したと思われるもののみを抽出し、それらをリード文とともに分かりやすく紹介しています。主たる利用者として、高校生や高校教員、留学希望者を想定しています。コンテンツの多くは、それぞれ、「高校生向け」「高校教員向け」「留学希望者向け(For international students)」でソートし、表示することが可能です(図1)。



図1 KNOTのイメージ

### (2)KNOTの各コンテンツ

KNOTは、オープンコンテンツを高校での補助教材や発展学習のための教材あるいは、進路選択の際の参考資料としての活用を促すことを目的としています。そのため、オープンコンテンツの使い方(図2)や活用事例の紹介(図3)、オープンコンテンツを实际に使った高校生、高校教員へのインタビュー(図4)といった多様な記事が掲載されています。

(鈴木 健雄・河野 亘・田口 真奈)



図2 オープンコンテンツの使い方とQ&A



図3 活用事例の紹介記事



図4 高校生、高校教員へのインタビュー

## IV. 教育アセスメント

### 1. 医学部との連携

#### (1) 医学部教学IRの推進

2016年度より、医学教育の推進に特化した医学教育・国際化推進センターと、特定の分野に限定しない形で教育改善支援を行う本センターとが、お互い持つ知識やリソースを提供・共有できるような懇談の場を設けて、様々な話題について情報交換(懇談会)を行ってきました。

2018年度は、こうした関係性を基盤に、医学部教学IR(Institutional Research)の試行的運用に着手しました。医学教育・国際化推進センターと医学部教務課、全学支援組織である教育推進・学生支援部教務企画課教育情報推進室と本センター教育アセスメント室の4者が協働して、医学部における教学IRの取組を進めてきました。

月に一回程度集まって、教学IRにおけるリサーチクエストionsを検討し、扱うべきデータや分析の方向性、担当者の役割分担などを協議してきました。ここで検討してきた成果を、「第23回 京都大学医学部教育ワークショップ(KUROME)」(2018年12月22日、於：京都ブライトンホテル)において紹介し、部局の先生方と活発な議論を行いました。当日の具体的なプログラムは以下の通りです。

- 1.趣旨説明とチーム紹介(錦織宏准教授/医学教育・国際化推進センター)
- 2.IR/教学IRとは何か?(山田剛史准教授/高等教育研究開発推進センター)
- 3.医学部教学IRについて(錦織宏准教授/同上)
- 4.医学部教学IRにおけるデータ分析(増井一晃主任/教育情報推進室)
- 5.京大医学部における留年者の学習特性に関する探索的検討(山田剛史准教授・勝間理沙研究員/同上)
- 6.質疑応答

ここで得られた意見やコメントシートの内容を反映させる形で、次年度も継続的に実施していければと思います。

また、この間進めてきた取組(知見やノウハウ)は、他部局でも展開可能なものです。全学支援部署の1つとして、他部局での支援にもつなげていきたいと思っています。

#### (2) 医学部人間健康科学科での報告

上記KUROMEでの報告をきっかけに、人間健康科学科が主催する「第11回 Health Science Cafe(FD 討論会)」(2019年3月22日)において、報告(「教学IRについてーデータに基づく議論のマスター」山田剛史)を行いました。次年度への連携・支援につなげていきたいと思っています。

(山田 剛史・勝間 理沙)



KUROMEでの報告の様子





## 2. 教育学部との連携(体系的なアセスメントの推進)

2016年度より、教育アセスメント室では、教育学部における教育の内部質保証および向上支援を行ってきました。主に、以下のよう形で支援を行っています。

### (1) 独自の学生調査を核とした組織的な教育改善支援

最初に着手したのが、2016年度からリニューアルされた初年次必修専門科目「教育研究入門I・II」(前期・後期)の効果検証を行うための学生調査(質的・量的)の開発でした。2016年度以降、前期の授業開始時、前期の授業終了時、そして後期の授業終了時の3時点で調査を実施し、学生の学習実態を把握するとともに、効果検証の結果を踏まえて当該授業の改善支援を行っています。

また、当該調査には、部局のディプロマ・ポリシー(DP)の項目を盛り込んでおり、さらに高年次対象の調査や卒業時・修了時の調査も導入し、入学から卒業・修了まで一貫した学生調査を開発・実施しています。

### (2) 特色入試入学者を対象とした追跡調査の支援

学部内に設置した特色入試追跡調査ワーキンググループのメンバーとして、特色入試入学者に対するインタビュー調査の実施と分析に携わっています。2018年度には、特色入試入学者の1回生(3期生)から3回生(1期生)を対象にしたグループインタビューを実施しました。加えて、上記のアセスメントの分析結果も踏まえつつ、特色入試の効果検証の支援を行っています。

### (3) アセスメント結果のフィードバックによる内部質保証の支援

上記のアセスメントによって得られたデータ分析の結果は、教育研究入門の担当教員や教育学研究科セミナー(研究科全体のFD)の場で毎年報告し、改善につなげています。これら一連のPDCAサイクル(内部質保証)は、当該研究科の教務委員会や自己点検・評価委員会等と連携しながら進めています。

当該部局での支援活動は、他部局においても効果的な教育改善のモデルになり得ると考えています。

2018年7月12日(木) 17:00-18:00  
第10回 教育学研究科セミナー@教育学研究科第1会議室

### 教育学部生の意識と「教育研究入門」を通じた学びの変化

山田 剛史 / Tsuyoshi YAMADA, Ph.D.  
京都大学 准教授  
高等教育研究開発推進センター(教育アセスメント室)  
大学院教育学研究科

E-mail: yamada.tsuyoshi.7u@kyoto-u.ac.jp

(山田 剛史・川内 亜希子)



### 3. 産学協働イノベーション人材育成協議会との連携

上述した通り、医学部や教育学部など教育・研究組織との連携を行いつつ、全学的な教育プログラムを実施している組織との連携にも着手し始めています。

2018年度は、京都大学が事務局を務める一般社団法人 産学協働イノベーション人材育成協議会(C-ENGINE)と連携し、当該事業の効果検証のためのツールを開発しました。

当該事業の中心は「研究インターンシップ」と呼ばれる、主に博士後期課程の大学院生を対象とした教育プログラムです。現在、参加大学は全16大学(2018年10月現在)、参加企業は全40企業(2018年7月現在)となっています。当該事業の取組の詳細については、ウェブサイト(<http://www.c-engine.org/>)をご覧ください。また、代表理事である本学の北野正雄教育担当理事・副学長に行ったインタビューの記事(<http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/news/news-844/>)も併せて紹介させていただきます。

具体的には、事務局と定期的にミーティングを重ねながら、博士後期課程の大学院生が研究インターンシップを通じてどのように成長し、能力を身につけたのかを評価するためのツールを開発しました。その際、C-ENGINEが提示している「トランスファラブルスキル(4領域12の能力)」(by Vitae)を捉えるルーブリック(日本語版・英語版)(暫定版;下図)を開発しました。受入企業、実施学生の双方に対して、その意図や手順等を明記した資料も併せて作成しました。C-ENGINEの理事会において様々な指摘を受けながら、適宜改良を加えつつ、試行的な実施の段階に入っています。

(一般)産学協働イノベーション人材育成協議会 トランスファラブルスキルに関するルーブリック(暫定版) (2019年度版:学生編向け)

4. 極めて優れている	3. 優れている	2. まよます	1. 努力が必要	(評価表)	
				評価 (1~4で選択して下さい)	自己評価コメント (実習終了後に全体を振り返って記入ください)
				実習前	実習終了後
<b>A 知識・知的能力</b>					
A-1 理論的知識と情報収集力	深い、広い理論的知識をもち、理論的知識と結びつけて、研究主題に関する適切な情報収集を行うことができる。	深い理論的知識をもち、理論的知識と結びつけて、特定の限られた範囲に関する理論的知識を持ち、その知識と結びつけて研究主題に関する情報収集を行うことが、一定程度できる。	理論的知識は不十分ながら、理論的知識と結びつけて研究主題に関する情報収集を行うと意識している。		
A-2 論理的思考・問題解決力	一貫した論理的思考に基づき、問題に対して適切な解決策を提示、実行することが極めて高い水準でできる。	一貫した論理的思考に基づき、問題に対して適切な解決策を提示、実行することができる。	ある程度一貫した論理的思考に基づき、問題に対する解決策を提示することができる。		
A-3 創造性・探究心	新しい知見・技術などを常に探索し、多面的な視座(エビデンス)と洞察に基づき、極めて優れた形で斬新かつインパクトのある創造を行うことができる。	新しい知見・技術などを常に探索し、洞察(エビデンス)と洞察に基づき、十分な創意を駆使して斬新な創造を行うことができる。	特定の限られた範囲でであり、新しい知見・技術などを探索し、洞察(エビデンス)と洞察に基づき、創造を行うことへの意識を示している。		
<b>B 個人的能力</b>					
B-1 熱心さ、自信、責任	研究や仕事に対し、極めて高い水準の熱心さ・自信・責任感を持って取り組むことができる。	研究や仕事に対して、常に熱心に、自信と責任感を持って取り組むことができる。	まだ行動には反響できていないもの、研究や仕事への熱心さ、自信、責任感を持って取り組んでいる。		
B-2 自己管理、時間管理	感情やモチベーション、体調といった面の自己管理と、職務の時間管理を、極めて高い水準で、継続的に推進的に行うことができる。	感情やモチベーション、体調といった面の自己管理と、職務の時間管理を、継続的に行うことができる。	現状としては不十分水準であるが、感情やモチベーション、体調といった面の自己管理と、職務の時間管理の必要性を認識している。		
B-3 将来のキャリアプランを策定・実行する力	将来のキャリアプランを明確に描くための具体的な行動を主体として実行することが極めて高い水準である。(例:メンバー・研究チームメンバー、研究推進者、経営者層など、様々な異なる立場の人々に相談し、より具体的)	将来のキャリアプランを明確に描くための具体的な行動を主体として実行することができている。(例:メンバーだけでなく、研究チームメンバーなど、複数の人々に相談し、より具体的)	具体的な行動の立案には至っていないものの、将来のキャリアプランを策定する必要性を感じ、それに伴う行動を起こす意識を示している。		
<b>C 研究の管理・推進・評価</b>					
C-1 専門家としての高い専門知識と深い理解	専門家でなくても、健康と安全、倫理・道徳に関する正確な理解をもち、それに基づいて振舞うことができる。	専門家としての健康と安全、倫理・道徳に関する正確な理解をもち、それに基づいて振舞うことができる。	専門家として扱えるべき、健康と安全、倫理・道徳の重要性を認識している。		
C-2 研究計画と進捗	所属部署の研究戦略の理解のもと、所定の期間内に研究計画を立案し、進捗を管理し、必要に応じて柔軟な変更を行いながら、研究を進捗させることができる。	所属部署の研究戦略の理解のもと、所定の期間内に研究計画を立案し、進捗を管理し、必要に応じて柔軟な変更を行いながら、研究を進捗させることができる。	研究計画の立案は十分にできていないものの、所属部署の研究戦略の理解のもとに研究計画を立案し、進捗を管理し、必要に応じて柔軟な変更を行いながら、研究を進捗させることができる。		
C-3 資金管理・経費の理解に基づく振舞	研究に際して要するコスト、研究成果から期待される利益に関する極めて広い見識を持ち、その理解に基づいて研究活動に取り組むことができる。	研究に際して要するコスト、研究成果から期待される利益に関する見識を持ち、その理解に基づいて研究活動に取り組むことができる。	研究に際して要するコスト、研究成果から期待される利益に関する極めて広い見識を持ち、その理解に基づいて研究活動に取り組む必要性を認識している。		
<b>D 組織・影響・インパクト</b>					
D-1 コミュニケーション能力	どのような相手に対しても、相手の発言・行動を理解し、自分の考えを相手にわかりやすく伝えることができる。	相手の発言・行動を理解し、自分の考えを相手にわかりやすく伝えることができる。	実際のコミュニケーションには反響できていないものの、相手の発言・行動を理解し、自分の考えを相手に伝える能力の重要性を認識している。		
D-2 社会への貢献力・影響力	自分の研究が社会に貢献・還元することの意義と、社会に与える影響の大きさを理解し、極めて優れた形で社会貢献の推進ができる。	自分の研究が社会に貢献・還元することの意義と、社会に与える影響の大きさを理解し、社会貢献を推進することが適切にできる。	漠然としたものではあるが、自分の研究が社会に貢献・還元することの意義と、社会に与える影響の大きさを理解し、社会貢献に関する具体的な提案をすることができている。		
D-3 他者との協働	メンバーの多様性とチーム内での自らの立ち回りを理解し、また、極めて優れた形で、他者と協力しながら研究を進めることができる。	メンバーの多様性とチーム内での自らの立ち回りを理解し、また、他者と協力しながら研究を進めることができる。	実際のチームワークには活用できていないものの、メンバーの多様性とチームでの役割分担を行い、他者と協力して研究を進める必要性を認識している。		

(山田 剛史)

## 4. MOOC・SPOCのアセスメント

主に以下の2つの目的から、MOOC・SPOCのアセスメントを行っております。

- ①今後のコース改善のため
- ②学内での普及・拡充のため

### (1) MOOCのアセスメント

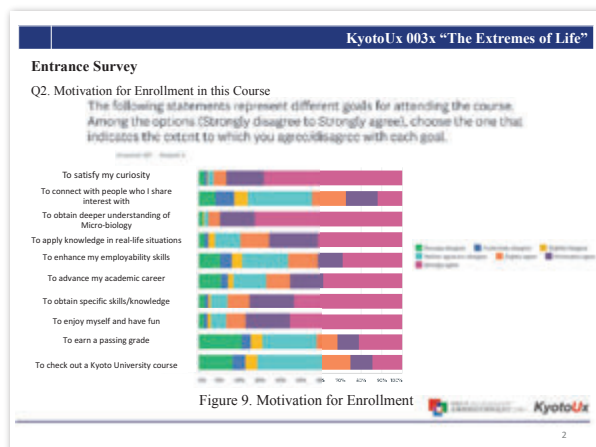
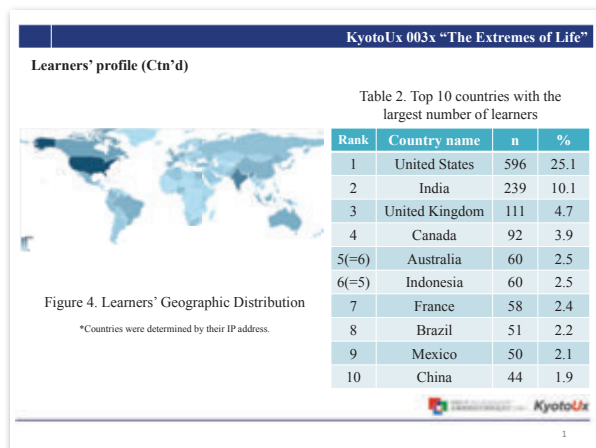
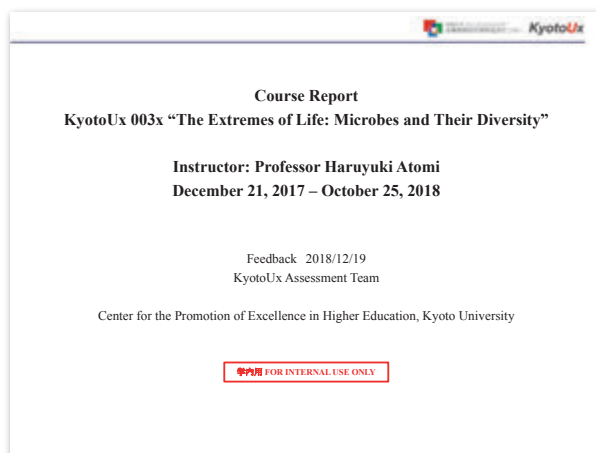
#### ①コースレポートの作成とフィードバック

本センターでは、アセスメント室が主体となって、MOOCの講義に関わる様々なデータを収集し、今後の講義の改善に役立つ調査研究を行っております。後述のように受講者からデータを集約して、それぞれのコースに対してコースレポートを作成しています。このコースレポートを使って担当教員と議論を行い、次回の開講の際にどのような改善を加えるかを検討することが目的です。

MOOCのプラットフォームであるedXからは、受講者情報(年齢、性別、地理的情報など)に加えて、課題への取り組み、講義ビデオの視聴といった学習者の学習履歴が提供されます。

また、講義の受講の前後事でオンラインアンケート調査を本センターで独自に行っています。このアンケート調査では、受講の動機、事前の知識、事後のコメントなどに関するデータを集めています。

2018年度は、9名の先生に対して、制作チームとアセスメントチーム合同でフィードバックを行い、MOOCのコース改善に資する議論を行ってきました。こうした議論を経て、専門用語をまとめた資料集の作成や、演習問題の改善などが今後取り組むべき課題として浮上しました。



コースレポートの構成	
コースの基本情報	開講期間など
コースレポートの要約	コースレポートの内容を1ページに要約したもの
人口統計学的指標	性別、年齢、地理的情報など
行動ログに基づく集計	コンテンツのアクセス率、問題への取り組み、成績の分布のグラフなど
質問紙調査のデータ集計	Entrance Survey や Ending Survey などコース中で実施した量的データの集計
受講者からのコメント	コースの改善の要望などを一覧にまとめたもの



## ②Annual Reportの作成

MOOCの成果を伝える資料として、Annual Reportを作成しています。Annual Reportでは、京都大学で1年間に開講したコース全体に対して、1)何力国から、2)何名が登録し、3)修了証が何部発行されたか、の情報が一目でわかります。また、社会貢献という観点から、特に発展途上国の教育機会の乏しい人々に対してどれだけリーチできたかも情報として提示しています。

これらの統計から、MOOCがこれまでの高等教育の壁を壊し、教育の機会均等、生涯学習という観点において極めて魅力的な学習方法であることがわかりました。現在、上記の情報を一望できるマネジメントシステムである“Hawk Eye System”を開発中であり、本センターのMOOCの現状をリアルタイムで把握することが将来的に期待されています。





## (2) SPOCのアセスメント

### ①コースレポートの作成とフィードバック

MOOCと同様、SPOCにおいてもコースレポートの作成、コース前後でのアンケート調査を行っております。基本的な構造は、MOOCのコースレポートと同じですが、SPOCは学内の授業と連動して使われることがあります。そのため、その授業を担当する教員の要望や目的に応じて、アンケートの評価項目を柔軟に追加・修正しています。例えば、今年度SPOCとして開講したコースの1つは、対面授業と連動しており、学生が各自でオンライン動画を見て学んだことを活かして授業が行われました。この際に用いられたアンケートでは、その科目に対しての「興味・関心」が評価項目として設定されました。この評価項目に対する調査の結果をコースレポートに記載し、それをもとに担当教員にフィードバックすることで、今回のコースを振り返り、授業改善への方向性を議論することができます。

### ②教員アンケートの実施

SPOCを学内で普及させていく上では、学内の教員の協力が欠かせません。そのため、2018年度からSPOCを制作した教員に対してのアンケート調査を実施しました。アンケートでは、以下のような項目が用いられました。

- 制作に至ったきっかけ
- 認識の変化:制作における負担、内容理解度に対する不安など
- 自身の教授スキルへの影響

この調査から、SPOCの制作が、教員にとって「自分の授業内容を改めて整理することができる」、「自分の教え方に関して振り返ることができる」という機会になっている、すなわち教員にとってのFDの場となっていることがわかってきました。また、制作は最初に思っていたほど負担ではなかったというような声も聞かれました。教員から得られたこのようなデータを開示していくことで、今後のSPOCの普及・拡充へと広めていくことを計画しています。

(長沼 祥太郎・山田 剛史)

## V. 国際連携

本センターでは、海外の大学教育の研究開発組織や研究者・実践者との交流・共同研究を進め、そのプロセスや成果をシンポジウム、研究会、書籍などで公開しています。

### 1. 国際シンポジウム「ブレンディッドな次世代高等教育を展望する ―アジアのトップ大学のICT活用教育最前線―」

北京大学、ソウル大学校、香港科技大学といったアジアのトップ大学から先端的取り組みを先導しているリーダーやアドミニストレーターを基調講演者として迎え、2018年3月2日、京都大学芝蘭会館にて国際シンポジウムを開催しました。

近年、MOOC・SPOC・OCWやその他のオンライン教材・学習環境を利用した反転学習やBlended Learningが国内外で進み、MOOCやオンライン教育を利用した新たな単位・学位・専門資格の取得システム・制度づくりの動きが活発になっています。我が国でも、産業分野や労働市場の急激な変化に伴う「社会人の学び直し」や「リカレント教育」の推進、ICTを利用した新しい教育方法の戦略的な活用は、大学関係者や産学官のステークホルダーにとって喫緊かつ重要な課題となっています。

本シンポジウムは、各大学の取り組みの事例紹介等を通じ、ICTや新たな教育方法・環境を利用し、多様な学生の学びをいかに効果的・効率的に支援できるかを概観し、ブレンディッドな次世

代高等教育の可能性を展望することをめざして企画されました。講演やパネルディスカッションでは、MOOCの開発や反転学習の実践、ラーニングアナリティクスに基づくブレンディッド教育カリキュラムの開発、マイクロクレデンシャル等の多岐にわたる話題が、各大学の先進的な実践事例と共に取り上げられました。

参加者数は86名(学内39名、学外47名)にのびりました。事後アンケート(回答者数33名)の結果を見ると、有意義度は平均4.5(5件法)で、回答者全員から有意義であったという回答が得られました。自由記述では、「MOOCによる教育と大学における教育の関係・違いという側面からの話題が大変興味深かったように思います。時代の流れと現実のカリキュラム作りという視点も考えさせられた点でした。」「MOOCの教育を作る側および運営する側からの展望や課題に関して考えることができ、10年後の社会の様子を展望することができた点が参考になった。」といった意見が寄せられました。

- 国際シンポジウム: <http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/wp-content/uploads/2018/02/20180302.pdf>



プログラム	
13:30～	開会挨拶 喜多 一(京都大学情報環境機構長・国際高等教育院教授)
13:35～	講演「京都大学におけるMOOC・SPOCの現状と展望」 酒井 博之(京都大学高等教育研究開発推進センター准教授)
13:50～	講演「京都大学におけるICT活用教育促進の取り組み：教育実践の見える化と共有を通じて」 田口 真奈(京都大学高等教育研究開発推進センター准教授)
14:05～	特別講演「ICTによって強化された2025年の高等教育を展望する」 飯吉 透(京都大学教育担当理事補・高等教育研究開発推進センター長・教授)
14:25～	特別講演(ビデオ出演)「MOOCとブレンディッド・ティーチングの促進：大学と教員としての経験から」 Xiaoming Li (Head of MOOC initiatives, Peking University, Director, Institute of Network Computing and Information Systems)
14:40～	休憩
14:55～	基調講演「香港大学におけるテクノロジー活用学習」 Ricky Yu-Kwong Kwok (Associate Vice-President (Teaching and Learning), University of Hong Kong)
	基調講演「ソウル大学におけるブレンディッド・ラーニング」 Cheolil Lim (Professor, Department of Education, Seoul National University, President, Korean Society for Educational Technology)
	基調講演「MOOCsを越えて：挑戦と好機」 Ting Chuen Pong (Senior Advisor to the EVPP (Teaching Innovation & E-learning), Director, Center for Engineering Education, Hong Kong University of Science and Technology)
16:10～	休憩
16:25～	パネルディスカッション モデレーター：松下 佳代(京都大学高等教育研究開発推進センター教授) 指定討論者：喜多 一 パネリスト：Xiaoming Li, Ricky Yu-Kwong Kwok, Cheolil Lim, Ting Chuen Pong, 飯吉 透
17:45	閉会

※Kwok 教授の基調講演は諸事情により中止となりました。

(河野 亘・飯吉 透)



## 2. MSUとの交流

2018年5月23日、Michigan State University (MSU) の教職員・学生が京都大学を訪問し、本センターおよび本学国際戦略本部の教職員、教育学研究科高等教育学コース（本センターが教育学研究科にもつ協力講座）の大学院生らと交流を行いました。学生間交流では、各大学2名ずつ計4名でグループを作り、「学生の特徴」「大学が提供するサービス」「教育・学習上の問題点」などのテーマに分かれてグループワークを行いました。まず、それぞれが自大学の状況について報告した後、改善のためにどのような取り組みが必要かについて議論を行い、最後に、グループワークの成果を発表しました。

MSUの学生からは、教育経験を積むために大学院生が教壇に立った場合、その授業の質が保証されないことなどが問題として提起され、どのようにFD（ブレFDを含めて）を実質化していくべきかなどに関して意見交換が行われました。

日本とアメリカという異なる国においても、大学教育が抱える課題としては共通性があることを再確認し、問題の解決においては今回の交流のようにお互いの取り組みを共有する場が重要であることを強く認識できた、双方にとって有意義な機会となりました。



(松下 佳代・長沼 祥太郎)

## 3. 第94回公開研究会「課題ベースのコアカリキュラムにおけるコースデザイン、インタラクティブな講義、教員支援のあり方について」

2018年12月21日に、ハーバード大学メディカルスクールより、カリキュラム・フェローのガヴィン・ポーター氏 (Dr. Gavin Porter) をお招きし、第94回公開研究会を開催しました。ポーター氏は、香港大学のCETL (Centre for the Enhancement of Teaching and Learning) での講師の経験もお持ちで、世界的な2つの大学、とりわけ在籍期間の長かった香港大学での教育改善の方法について、様々なテーマについて報告がなされました。

現在の大学において、多様な学生たちを対象に、一般教育やリベラルアーツのカリキュラムを実施していく際には、多くの困難な課題に直面します。例えば、大人数のクラスで、当該分野を専攻しない学生たちをも授業に巻き込んでいくにはどうすればよいか、そういう授業を担当する教員にどんなFDを行うか、といった課題です。コースをどうデザインするか、クリッカーやクラウドソーシングをどう利用するかなどは、そうした課題を解決する糸口になります。ポーター氏は、このような内容について、香港大学のCOMMON CORE CURRICULUMのFDシリーズ“Pizza, Pinot, and Pedagogy”などを引き合いに出しながら、具体的かつ軽妙に話を展開していかれました。

英語のみの研究会であったこともあり、参加者は21名と多くありませんでしたが、東京からもMOOCやFDを担当しておられる方々が参加され、本センターの院生たちも積極的に参加して、大変活気に満ちた質疑応答・意見交換が行われました。

- 公開研究会：<http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/news/news-900/>



(松下 佳代)



## 4. 訪問・参加報告

### (1) 2018 Open edX Conference

**会議名称** 2018 Open edX Conference (<https://con.openedx.org/>)

**期間・場所** 5月29日～6月1日、モントリオール大学(カナダ)

**参加者** Isanka Wijerathne

今回のOpen edXカンファレンスはカナダのモントリオール大学、モントリオール商科大学、モントリオール理工科大学がホストとなって開催されました。大学教職員、教育研究者、技術者、Open edXの関連企業など400名を超えるOpen edX関係者が参加し、日本からは東京工業大学の関係者も参加していました。2日間の会議に加え、体験型のトレーニングセッションや開発者サミットも1日ずつ設けられており、私は本会議の他に、技術セッションやデータ解析セッションを中心に参加させていただき、様々な情報を得る機会となりました。

(Isanka Wijerathne、訳：安宅 純子)



### (2) 2018 edX Global Forum

**会議名称** 2018 edX Global Forum (<http://globalforum.edx.org>)

**期間・場所** 11月14～16日、Boston Park Plaza Hotel(米国マサチューセッツ州ボストン)

**参加者** 飯吉透・酒井博之・Isanka Wijerathne

11月14日から3日間にわたり、米国マサチューセッツ州ボストンのBoston Park Plaza Hotelにおいて第8回目となるedX Global Forumが開催されました。edXおよびその加盟機関から関係者が年に一度集い、MOOCやそれを取り巻く教育全般に関する現状や課題、edXの今後の方向性等に関して議論がなされました。

今回のGlobal Forumでは、2年前に開始した正規の修士課程プログラムとの単位互換を実現するプログラム「MicroMasters」等の受講者の体験を共有するセッションや、社会人のスキルの更新や向上をテーマとしたセッションが設けられるなど、大学を越えた学習機会提供の可能性に関する議論が増えてきたことが印象的でした。

(酒井 博之)





## Ⅵ. コミュニティ・ネットワーク形成支援

大学教育に関する改革や改善においては、国内外の新しい施策や学術的な動向、それに伴う他の大学や学部の実践的な取り組みについて情報収集する必要があります。その上で、必要な事項を、京都大学全体や各部局の教育改革・改善の取り組みに反映させなければなりません。

本センターでは、このような情報収集を行い、そこからコミュニティ・ネットワーク形成を図るべく、「あさがおメーリングリスト」「大学教育研究フォーラム」の2つのシステムを構築しています。

### 1. あさがおメーリングリスト <http://kyoto-u.s-coop.net/asagao/>

本センターが、2003年より16年にわたって提供しているサービスです。

- メーリングリストアーカイブ(検索機能付き)
- メール投稿フォーム
- ユーザー登録・登録解除フォーム
- メールアドレス変更フォーム

以上の4つの機能からなり、本センターや京都大学からの高等教育に関する案内が全国の関係者に配信されます。登録ユーザーからも、高等教育に関する各種イベント等の案内が配信されるので、全国の主だったイベントについての情報や今どのような施策や取り組みに全国の関心が向けられているかという動向を、このメーリングリストを通して把握することができます。

2019年1月現在で、ユーザー登録数は5,395名(2015年3,429名、2016年4,192名、2017年4,836名)、投稿・配信数は1,270件(2015年621件、2016年944件、2017年975件)で、ともに年々増加傾向にあります。全国の大学教育改革・改善に関わる多くの関係者は、あさがおメーリングリストに登録しています。

### 2. 大学教育研究フォーラム

#### (1) 大学教育研究フォーラムとは

本センターが1994年の設立以来開催してきた、大学教育改革や改善に関する施策や実践が報告される国内最大級のフォーラムです。2018年度で第25回を迎えます。

大学教育研究フォーラムは、①特別講演、②シンポジウム、③学術セミナー、④個人研究発表(口頭発表・ポスター発表)、⑤参加者企画セッション、を基本プログラムとしており、年によって小さな追加・変更を行っています。

#### (2) 第24回大学教育研究フォーラム(2018年3月20-21日)の開催

2019年1月現在、2018年度のフォーラムはまだ開催されていませんので、ここでは2017年度の実績をご報告します。2017年度は、以下のプログラムで開催し(敬称略)、計755名の方が参加しました。

##### ①特別講演

竹内 洋(関西大学東京センター長・京都大学名誉教授・関西大学名誉教授)

「アメリカを『鏡』に日本の大学を考える」

##### ②シンポジウム「人工知能に代替されない能力とその教育を考える」

報告者1 松原 仁(公立ほこだて未来大学副理事長兼教授) 「人間と人工知能の共存に向けて」

報告者2 河野 哲也(立教大学文学部教授) 「対話と思考と身体性—AI社会を生きる力—」

指定討論: 北野 正雄(京都大学理事・副学長)

### ③MOSTフェロー発表会「MEGA CRISIS 巨大危機 IN CLASSROOM～脅威と闘う教員たち～」

本センターでは、特徴ある授業実践を行っている全国の大学教員が参加するMOSTフェローシッププログラムを、2012年より実施してきました。MOSTフェローは、対面やオンラインで交流しながら、1年間かけてそれぞれの授業改善に取り組み、授業実践の中で直面する様々な教育的課題を相互の実践知から解決する大学教員の情報共有コミュニティを目指して活動しています。

MOSTフェローコミュニティでは、グッドプラクティスだけではなく、失敗事例や未解決の難題も共有されます。本発表では、授業や教育実践の中で実際に起こった「クライシス」を題材に、様々な困難をどうやって乗り越えていけばよいのかを考えました。

### ④学術セミナー

講師1：緒方 広明(京都大学学術情報メディアセンター教授)

「教育・学習データの利活用によるエビデンスベースの大学教育の未来像—ラーニングアナリティクスの研究実践を通じて—」

講師2：杉原 保史(京都大学学生総合支援センター長)

「学生の悩み相談の現場から—近年の傾向と課題—」

### ⑤参加者企画セッション(計14件) ※2015年度は11件、2016年度は14件

ある特定のテーマでの研究・実践交流を促す目的で、一般参加者から募集するセッションとなっています。2017年度は「学修成果の多角的・継続的な可視化とその活用—育成と一体化した評価の試み—」「3年間の調査から見えてきたアクティブラーニング型授業の学習効果」「日本における大学版『知の理論』の可能性」など。

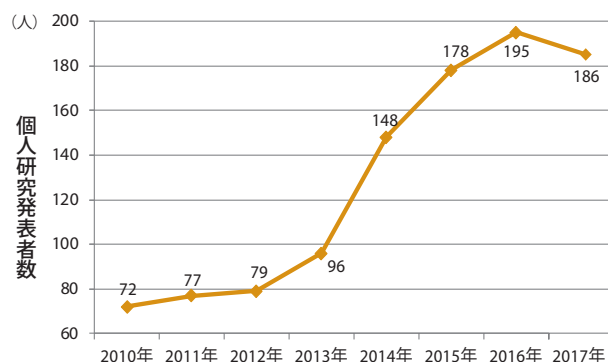
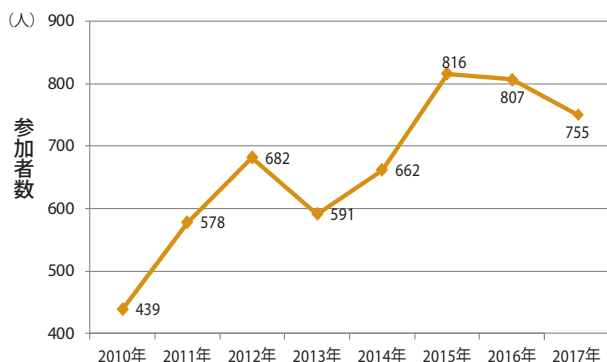
### ⑥個人研究発表(口頭発表106件・ポスター発表80件、計186件) ※2015年度は174件、2016年度は195件

### (3) 成果と課題

2010年度以来、フォーラムの個人研究発表者数はほぼ増加傾向にありましたが、2017年度は初めて前年度を下回りました。一方、参加者数は、ここ3年やや減少傾向にあります。一因として2016年度からの参加費の徴収が考えられますが、同じ年に発表費の徴収も始めたにもかかわらず発表者数はさほど減少していないことを考えると、より熱心な参加者にまわってきたということかもしれません。

主催者としては、毎年、事後アンケート結果にもとづき、プログラムや運営方法の改善を重ねてきていますが、さらに魅力的なフォーラムにしていきたいと思えます。

- 大学教育研究フォーラム：<http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/forum/>



参加者数・個人研究発表者数の推移(2010-2017年度)

(松下 佳代)



## Ⅶ. 産学連携

### 1. 学校と社会をつなぐ調査(通称「10年トランジション調査」)

「学校と社会をつなぐ調査」(通称:10年トランジション調査)は、2013年に京都大学高等教育研究開発推進センターと学校法人河合塾が共催で開始した、高校生を対象に10年間追跡調査するものです。全国378校の高校2年生45,311名が調査に参加し、この度の大学3年生の調査には、3,239名の大学生(2015年時の高校卒業時に現役で大学進学した生徒)が引き続き参加しました。当時(2013年)高校2年生だった生徒はいま大学4年生(現役合格者)になっています。

- 2018年2月には、高校2年生から大学1年生へのトランジションについての成果を、『高大接続の本質－学校と社会をつなぐ調査－から見えてきた課題－』(溝上慎一責任編集 京都大学高等教育研究開発推進センター・河合塾編 学事出版)として刊行しました。
- 高校2年生から大学3年生までのトランジションについての分析結果は、いま報告書を刊行準備中です(2019年3月予定)。報告書の主な結果は、次の2点にまとめられます。



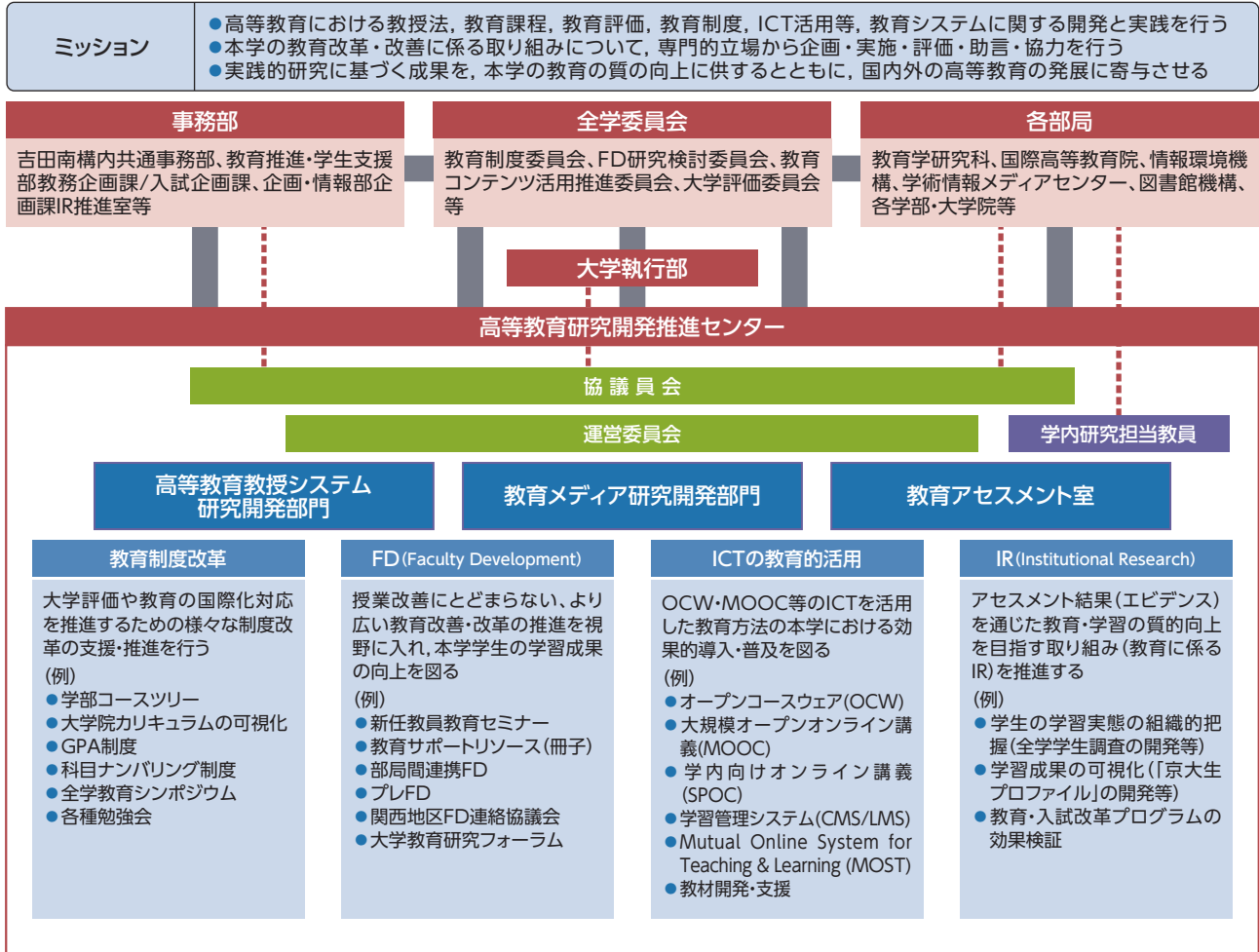
- (1) 資質・能力は、高校2年生から大学3年生にかけて、クラス内での変化は統計的に認められるものの、クラス間を移動するほどには大きく変化しない(例えば低クラスから中クラスまたは高クラス、中クラスから高クラスまたは低クラスなど)。
- (2) 資質・能力の高低と学習(主体的な学習態度やアクティブラーニング外化など)、キャリア意識(二つのライフ)は密接に関連している。資質・能力の高い者はアクティブラーニングをはじめとする学習に意欲的に取り組み、キャリア意識も高いといえる。

これまでの報告書は下記をご覧ください。

<http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/trans/>

(溝上 慎一)

## 全学機能組織としてのセンターの取組と連携体制



### 京都大学高等教育研究開発推進センター 教員・スタッフ

飯吉 透 教授(センター長)	緒方 孝亮 特定研究員
松下 佳代 教授	鈴木 健雄 特定研究員
溝上 慎一 教授(～8月)	安宅 純子 特定研究員
田口 真奈 准教授	長沼 祥太郎 特定研究員(～12月)
酒井 博之 准教授	河野 亘 研究員
山田 剛史 准教授	川内 亜希子 研究員
森村 吉貴 特定准教授(兼)	Nikan SADEHVANDI 研究員
岡本 雅子 特定助教	勝間 理沙 研究員
藤岡 千也 特定助教	木崎 稜平 技術補佐員
長谷 海平 特定助教	岡田 正大 技術補佐員
Isanka Wijerathene 特定研究員	坂本 久理 特定職員



京都大学 Center for the Promotion of Excellence  
in Higher Education, Kyoto University

## 高等教育研究開発推進センター

〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町  
TEL. 075-753-3087 FAX. 075-753-3045

発行日/2019年3月15日 発行/京都大学高等教育開発推進センター 印刷/双林株式会社